
清冽な流れ

八木進

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

清冽な流れ

【Nコード】

N4052P

【作者名】

八木進

【あらすじ】

渋谷で路上ライブをしていた3人グループのバンド。その女性ボカール白鳥沙織の声に惹かれた中年の大学講師宮本潤一。それは、交通事故であっけなく死んでしまった娘のことを重ねていたからのはずだった。しかし、2人は運命に導かれるように、違った方向に向っていった。

清冽な流れ

潤一

信号が青に変わった。人々が一斉に動き出す。中には走り出す人もいて、反対側から歩いてくる人にぶつかっている。宮本潤一は、ゆっくりと歩こうとするが、あらゆる角度から人が自分に向って突進してくるようで気圧される。しばらく仕事で地方へ行っていた潤一は、久振りの渋谷スクランブル交差点に戸惑ってしまう。まるで田舎者のようだ。潤一がちょうど交差点を渡りきったところで信号が赤に変わり、背中を車が走り抜けていく。

翌週の講義のための資料を入手しようと、潤一がよく行く本屋の帰りである。潤一は間もなく50歳になる。若い時は、こうした街の喧騒さえ気持ちを高ぶらせるものだった。しかし、今では精神的な疲れを感じる。

午後4時半。渋谷の街に春の夕暮れが訪れようとしていた。やがて若者達の精神を興奮させる夜の街に変わろうとしている。

そんな時、行く手から澄んだ女性の声が聞こえてきた。モヤイ像の前のガ・ドレ・ルを背に路上ライブが行われていた。女性一人に男性二人のグループである。周りを20人以上の人が囲んでいる。潤一もボ・カルの女性の声に引き寄せられるように、その輪に加わっていた。ギター・ケ・スの横に、ソルトレインというバンド名が書かれていた。渋谷に限らず、路上ライブを行っているミュージシャンはいっぱいいるが、潤一が立ち止まって聞いたグループはひとつもなかった。別に、潤一は音楽が特別好きというわけでもなく、ましてや音楽に詳しいわけでもないが、聞くに耐えられるのにお目にかかったことがなかった。だが、彼女の歌声はただ澄んでいるだけでなく心に響くものがあった。一曲終わることに、皆拍手をしている。あっという間にライブは終わり、スタッフらしき女の子が劇場

ライブの案内とCDの販売のために囲んでいた人達の間を回っている。潤一もCDを買っていた。思えば、自宅にCDプレイヤーもなかったが、思わず買っていた。なんだか知らないが妙に興奮していて、自宅のある駅に降り、そのまま家電店に飛び込み、プレイヤーを手に入れた。

沙織

今日は集った人も多かったせいかな、皆ノリがよかった。沙織自身も久振りに気持ちが入っていた。いつも同じようにやっているつもりでも、そこは人間だから集った人数とかその日の雰囲気とかによって差が出てしまう。特に路上ライブの場合はそうだな。自分達のホームベースで路上ライブの案内もしてるので、一部のファンはきてくれているが、ほとんどが、その時たまたまそこにいただけに過ぎない。

今日はCDも結構売れたし、劇場ライブの案内もさばけた。

路上ライブにしろ、劇場ライブにしろ、終わった後で飲みながら反省会をすることが多い。今日も、いつもよく行く下北沢の居酒屋で反省会をしているところだ。だが、今日は皆ノリがよかったせいで、反省会にはなっていない。

「タケシさん、今日ノリノリでしたよね」

ギタ-を担当している一番年下の船山建ことケンが言う。

「お前だって、結構ノッてたじゃないか」

と実質上リ-ダ-格の吉村武志こと通称、タケシが答える。

「でも、私もノッてたよ」

沙織も言う。

「そうだな。でも、良かったぜ。最後の“望み”なんか、横にいて思わずジンときちゃったもんな」

あまり人のことを誉めないタケシにそう言われると、ちょっと嬉しい。

「きつと、19日のライブにもたくさん来てくれますよ」

このバンドのマネ・ジャ・の中村由佳が、顔を真っ赤にして叫んでいる。酒が弱いくせに酒好きで、すぐにハイテンションになる。

「うん、そうだといいな」

タケシもそう思っているようだ。

バンドを結成したのは、今から6年前。高校を卒業したばかりの白鳥沙織が、高校時代の友達と3人でグル・プを組んだ。しかし、所詮素人だけのグル・プはすぐに仲間割れして、1年もたず解散の憂き目にあった。その後、ネットで仲間を募集したところ、吉村武志こと通称タケシが参加してきた。その頃タケシは、すでにあるバンドメンバ・として活躍していたが、そのバンドを辞めて沙織と一緒にやってくれるという。その時につけたバンド名が、ソルトレインで、今でも続いている。その後、通称ジョ・が加わり3人のバンドとなったが、ジョ・は長続きしなかった。沙織とタケシだけはずっと続いているが、もう一人はジョ・のように何人も入れ替わっている。病気で辞めてしまったものもいるが、多くは意見の違いによるものだ。船山建も一度抜けて、今再び参加している。

当分はこのメンバ・でいけそうだ。沙織も、このメンバ・でやるのが一番居心地がいい。

ケンは、少し変わったところもあるけれど、根はいいヤツだ。タケシもそのことを知っていて、ケンを可愛がっている。今のメンバ・の中で、一番メジャ・デビューを望んでいるのが、ケンであった。沙織も、タケシも、かつてはメジャ・デビューを熱望した時期もあったが、最近では本当に歌いたい歌を歌えて、それを聞いて感動してくれる人がいればいいと思っている。恐らくタケシも同じ思いでいるはずだ。最近、そういうことは話さないけど、そう思う。とはいえ、これで生活している以上、CDの販売や劇場ライブ収入があつてのうえだが、それも今は成り立っている。根強いファンがいてくれて支えられている。とても幸せなことだと思っている。タケシは結婚していて、小さな子供もいるから、沙織ほど単純ではないかもしれないが、生活できる程度の収入は確保できていると思う。そ

の点、ケンはメジャ・になることが大事だという価値観を持っている。メジャ・になって、大きな劇場や広い野外ホールで何万人もの人を集めてライブをやるのが夢だと言っている。ソルトレインを一時抜けて、他のバンドに移ったのも、そういう理由だった。だが、結局メンバ・と合わずソルトレインに戻ってきた。でも、今でもチャンスがあれば、ソルトレインを抜けてでも、その道を選ぶだろう。それはしょうがないことだと思う。だから、今日のように飲んだときに、時々ケンが口にする「メジャ・デビューできたらいいね」という台詞は、皆軽く受け流している。

娘の死

じりじりと焼け付くような暑さが続いている。都会では地球温暖化の影響でヒートアイランド現象が起こり、尋常でない暑さとなっている。単に温度が高いだけでならともかくも湿度も高いものだから人間の気持ちを苛立たせる。

あの日も、そんな暑い日だった。駅までわずか8分ほどの距離を歩いただけで、身体から汗が噴出している。ハンケチで顔の汗をふきふき電車に乗り込むと、クーラーの冷気に汗で濡れた背中を冷やされ、ぞくぞくとする。いつものことである。しかし、その日は何かが違う感覚がした。2つ目の駅に差し掛かったとき、つり革を持つ手に突然震えがきた。特に体調が悪かったわけではないのに、その震えはしばらくの間止まらなかった。3つ目の駅を過ぎた辺りで、急に震えは止まった。嫌な感覚だった。しかし、その日は朝から立て続けに会議が入っていて、そんなこともすっかり頭から消えていた。

「部長、電話です」

営業係長の熊倉が、受話器を押さえながら言う。会議から自分の席へ戻ったところに、その電話が入った。

「どこから？」

「ご自宅です」

「自宅？」

家族から会社で電話をしてくるということは、今まで一度だけしかない。その時はいい知らせだった。娘が生まれたときだった。潤一の母親が、嬉しさのあまりかけてきた。会社には電話するなど、あれほど言っておいたのに。

「ええ、奥様です」

今回は妻の由美からであるというが、娘の誕生の時と比べ、思い当たる節がない。とにかく出てみる。

「あなた、あなた、マミが・・・」

ただならぬ声である。

「マミがどうした」

「交通事故にあつたの」

「何だつて」

自分でもどの位大きな声を出したのかわからない。しかし、部屋中のものがこちらを向いているということは、相当大的な声をあげたに違いない。妻は、電話の向こうで泣いている。

「それでどうなんだ」

聞くのが恐ろしかったが、聞かずにはいられない。ところが、妻から返事が返ってこない。潤一は自分の電話を持つ手が震えているのに気付く。

「だから、どうした」

「即死だったの・・・」

目の前が真っ暗になった。すべての音が消える。部下たちが異常に気付いて周りに集ってきているが、潤一にはそれが自分の周りで起きていることとは思えない。感情が抜け落ちる。不思議と悲しいという気持ちは湧いてこなかった。あまりに突然だったから。

「部長、部長、どうしたんですか」

誰かの呼び声に、我に帰る。

「娘が交通事故で死んだ」

「えっ」

そう言ったきり、皆黙り込んでしまった。

「それで、病院はどこなんだ」

「綱川駅前の綱川中央病院」

「綱川駅・・・」

思わず絶句していた。今朝の通勤途中で、つり革を持つ手が急に震えたのが、綱川駅を出たところだった。

潤一の記憶は、一度ここで途絶えている。あの後、会社のメンバーに何を言い、どう病院まで駆けつけて行ったのか、ほとんど記憶がない。

病院の地下にある死体安置所で、娘のマミは何も言わずに潤一を迎えた。妻は潤一の顔を見て泣き崩れた。潤一は、マミの顔にかけられていた白い布をめくる。マミの顔は綺麗だった。傷ひとつなかった。妻に似て美しい娘だった。静かに寝ているような娘の顔に、潤一は自分の顔を近づけた。合掌するように組まれた手に触れる。その冷たさに、ふいに涙が出る。あの時、君は知らせてくれたんだね。私に来てくれと言っていたんだね。ごめんね。間に合わなかったよ、父さん。そして、それから3年後、妻も若くして癌で逝ってしまった。

どこかで、歌声が聞こえる。美しい声だ。

潤一は、今自分が渋谷で行われているソルトレインの路上ライブの輪の中にいることに気付く。ライブを聞きながら、娘のマミのことを思い出していた。マミも高校時代からバンド活動をしていた。しかし、とうとう一回もマミの歌声を聞く機会は持てなかった。それを今でも後悔している。聞きたかったよ、父さんは君の歌声を。心の中でマミに語りかけている。

渋谷で再び出会ったソルトレインの沙織という女の子の歌声はやはり魅力的だった。それは、やはり沙織に娘の姿をダブらせているからであろつか。

潤一の会社

「社長、淳子さんからお電話です」

販促プランニングとデザイン製作を業務としている会社のアートプランニング社の社長、河合淳子からの電話だ。娘を失い、妻も失い、守るべきものの全てを失った時、潤一は会社を辞め自分の会社を持った。そうでもないかと、さらに深く暗い穴に落ち込みそうだったからだ。潤一の会社は、経営コンサルティングを業務としている。主に流通業・サービス業を対象としており、現在では社員数も20人の会社に成長している。アートプランニングは、取引先の1社であり、同時に河合淳子はもっかの潤一の恋人である。潤一が淳子が付き合っていることは、社内では公知のことであり、社員も皆“淳子さん”と呼んでいる。

「はい、宮本です」

「どうも。なんだか忙しかったみたいで、電話くれなかったわね。元気でいらした？」

「おかげさまで、忙しくてね」

「まあ、否定しないわけ。憎たらしい。少しは私のことも気にかけよ」

自分だって忙しい時には、電話一本寄越さないくせにと思いつながら聞いていた。

「悪かったね」

「やっと言ったわね」

これを言わせたのだ。潤一より9歳年下で、今年41歳になる淳子は、傲慢なところがある。30歳でOL生活を止め、独立してから着実に会社を成長させてきた。そうした過程で身に付いた対処法なのだろうが、男に対しても決して妥協はしない。

「相変わらずだなあ。ところで用件は？」

淳子が会社に電話してきたということは、仕事の要件だ。さすがにプライベートのことなら、携帯にかけてくる。

「ええ、実は私の会社で青空信用金庫のIRを頼まれたの。だから、相談できないかなと思って」

「そう。早いほうがいい？」

「ええ」

「じゃあ、明日の大学の講義の後なら時間作れるけど、どうかな」

「何時頃？」

「講義が終わるのが、午後3時半だから、それ以降だったら大丈夫だ」

「そう。では3時半頃、研究室へ行けばいい？」

「そう願えば助かるけど」

電話を切って、しばらく仕事をしていると、内山久美が書類を持って潤一の席へやってきた。久美はサービス業専門のコンサルタントであり、コンサルタントになる前はデパートに勤務していた。

「社長、浜名湖グランドホテルの件ですけど、ちょっといいですか」

「ああ、いいよ」

潤一は自分が広げていた書類を隅に寄せる。久美が潤一の横に椅子を持って来て座る。そして、手に持っていた書類を潤一の前に置く。今観光ホテルはどこも厳しい経営を迫られている。浜名湖グランドホテルも例外ではない。だからこそ、潤一の会社にコンサルティングを依頼してきたわけである。これまで1年間かけてじっくりコンサルティングを行ってきたせいか、最近では業績も上向きである。

潤一も当初はかなり時間を割いて現地に張り付いていたが、今は落ち着いてきたので、久美に任せている。久美の相談は、オ・ナ・の山田が、ホテルの別館を有料老人ホームにすると言い出したことについてであった。

「君の意見は？」

「もちろん、私はよく調査してみないと、なんともいえないと言っています。社長はどうですか」

「うーん、全くNOというわけではないけど、安易な転換も危険だね。調査もやって、じっくり検討しないと駄目だな。内山君のほうで、調査・研究してプランを検証してみてくれるか」

「はい、わかりました」

話しは終わった。だが、久美はすぐには席を立たない。何か言いたそうだ。

「他に何かあるの」

「いえ、あのー」

「うん？」

「淳子さん、何の件でした？」

グランドホテルの件では、淳子の会社にも仕事をしてもらったので、久美も淳子の事をよく知っている。

「青空信用金庫のIRの件だったけど」

「そうなんですか。それならいいんですけど・・・」

「グランドホテルにはもう関係しないから、心配するな」

「いえ、そんなことはありません。失礼しました」

そう言つて、久美は自分の席へ戻つて行つた。

久美は、娘が通つていた大学の先輩であり、かつ潤一の妻の後輩でもあつた。つまり、3人とも同じ大学の出身である。久美は潤一が前の職場から引き抜いた唯一の人材である。そうしたこともあり、よく家に遊びにきていたが、娘はもちろん、妻とも気があつていて、まるで3姉妹のようだった。小さい時に両親を亡くしている久美にとっては、家族のようなものだったのだと思う。だから、潤一が淳子と付き合っていることが気にいらないうのである。確かに、淳子は妻の由美とは全く違うタイプである。

大学

潤一が大学の講師になつてから、もう5年になる。仕事でお世話になつた東南大学の太木教授から誘いを受けて始めた仕事である。しかし、潤一の場合、非常勤講師であり、受け持つ授業のコマ数は少ない。そうでなくては、本業である経営コンサルタント業に差し支えるので、丁度よい。

講義が終わつて、潤一は太木研究室へ向う。太木教授が自分の研究室の中に、潤一の机と椅子を用意してくれている。今日は太木教

授はお休みなので、研究室には、誰もいないはずだ。ドアを開けると、潤一の椅子に座っていた淳子と目が合う。

しかし、この女性ほど大学の研究室に不似合いな女性はいないのではないかと思う。

今日も、真冬だというのに、胸の大きく開いたニットのセーターを着ている。

先日も、淳子が潤一の研究室にいる時に、大木教授に用事があった学生が勢いよくドアを開け、淳子を見た瞬間、ギョツとした顔をしていた。

「おっ、早いね」

「時間が空いちちゃったから、早く来てしまったのよ。すぐに出ない」
相変わらず強引で、自分のことしか考えていない。時々、自分はこの女性のどこに惹かれたのだろうと思うことがある。会っているとむつとさせられることが結構あるのだが、会えない期間が長くなるとと無性に会いたくなったり、他の男と会っているのではないかという不安に陥ったりする。いつしか、すっかり淳子のペースにはまっていた。昔だったら、こうした女性とは絶対付き合わなかったから、自分も変わったのかなと思う。

大木教授と一緒に初めて淳子が潤一の事務所を尋ねてきた時の印象は強烈だった。フリルのスカートに真っ赤なティアードキャミソールであったが、その色香はすごいものがあつた。もともと目鼻立ちのはっきりした顔をしているところへもつてきて、派手な服装をするものだから、どちらかといえば地味な潤一の事務所がそこだけスッポトライトを浴びたようになっていた。その時は、あのクソ真面目な大木教授が超派手な淳子を連れてきたものだから、男子社員たちは好奇の目で見ていたようだが、女性陣の評判は芳しくなかった。よく聞けば、大木教授の教え子ということであつたが、それにしても、大木教授に必要以上にベタベタしてみたり、平気で馬鹿にしたような発言をしていて、聞いているこちらがハラハラした。

「先生ったら、だから駄目なのよ。まったく嫌になっちゃう」

などと、夫婦か恋人同士しか使えない台詞を平気で言う。だが、言われている大木教授はそれが嬉しいようで、

「うん」

などと言っている。だから、当初は大木教授の愛人かと思ったほどである。事務所の女性陣に反発されるのも無理はない。当社の社員が、お世話になっていている大木教授にため口をきくことなどあり得ない。そんな淳子と潤一が付き合うようになるとは、その時職場の誰も想像しなかったのではないか。潤一自身、自分が淳子と付き合うようになるとは、思ってもみなかった。

研究室を出て大学の校門への道を歩いていると、大学のキャンパスには似つかわしくない淳子のことを、学生達が好奇の目で見ているのがわかる。淳子はそれを知っている。見られることが大好きなのだ。女は見られて綺麗になると、常々言っている。昨日仕事の打ち合わせがあると言っていたにも関わらず、映画を見たいと言い出し、付き合わされる羽目になった。こんなわがままなところが、いいのかもしれない。映画館から出た時には、もう午後9時近かった。食事をしながら、仕事の話をする。ところが、淳子の顔はいかにも面倒臭さそうである。

「だから、企画書をこんど持っていくから、その時でいいでしょ。今お食事の最中なんだから。せつかくのディナーがつまらなくなってしまうでしょう」

「しかし、大事なことだけは話しておこうと思ってね」

「今の話はわかったわよ」

「じゃあ、青空信用金庫の会社のIR活動の現状がわかる資料、FAXしておいてくれるね」

「はい」

「妙に素直じゃないか」

「あら、私はいつも素直ですけど」

そう言って、潤一を見る目は挑戦的だ。男なら誰でも自分を誘っているとは勘違いしてしまう目つきだ。

「そうだね」

とにかく、今日は逆らわないほうが無難なようだ。

「そうだねって、私を子供扱いしているの」

絡んできた。しかし、それは同時に潤一に甘えてきた証拠である。この後のパターンは大体読める。酒がさらに進むと、もつと絡んできて、最終的には帰りたくないと言い出す。

まあ、分かりやすい性格と言えるだろう。子供っぽい。

酔った淳子が、潤一の腕にからみつくようにして歩いている。

「ねえ、私のことどう思っているの」

「どおって言われても」

曖昧な答えをしていると、潤一の手をとって横道に導く。そこはラブホテル街だった。そのまま、ホテルへと入る。今日の淳子は性急だった。きつと何かがあるのだろう。部屋へ入ると、一転無口になった淳子が潤一のほうを見つめている。そして、潤一の胸に飛び込んできた。

「好き」

潤一は無言である。ここへ入ってきてしまったことを後悔している。最近、潤一は淳子に対する気持ちに揺らぎを感じているからである。もちろん、淳子が嫌いになったわけではない。だが、しかしこれ以上深く関係を持つことは、ひとつの方向へ向うことを意味する。淳子は見かけとは違い、繊細な神経をもっている。今日のようにお酒でも飲まないと、潤一に甘えることができない。いつも言いたいことを言っているようで、肝心なことは言えない。淳子の最近の言動を見ていると、潤一との結婚を意識し始めているのではないかと思える。しかし、潤一のほうは、結婚したいという気持ちは全くなかった。もちろん、それは相手が淳子だからというわけではなく、もう誰とも結婚するつもりはなかった。淳子にも、自分の考えは最初から話してあって、淳子はそれに賛成と言っていた。だが、淳子の本心は違うところにあった。淳子の体を抱きしめながら、どうすべきか迷っていた。しかし、さすがにこの場で自分の気持ちを淳子に

伝えることはできない。

淳子の熱い舌が潤一の舌にからみつく。潤一にとっても、久振りに女性との関係を持つということが、精神的興奮をもたらしている。淳子の片方の手が、潤一の下半身に伸びてくる。硬くなりはじめた潤一のモノを確かめると、淳子は、少し離れたところに移り、着ているものを一枚一枚脱いでいく。男の気持ちを誘うような、その仕草はどこで身に付けたのか。潤一も、それを見ながら服を脱ぐ。

潤一が淳子を抱き寄せ、そのままベッドへと導く。

「僕も好きだ」

久振りに抱く淳子の身体は、少し痩せていた。淳子は、外見はグラマラスに見えるが、意外とスリムである。潤一は淳子の唇を塞いで口を、そっと乳首へと移す。淳子が小さな声をあげる。手で淳子の体をくまなく、なでるように触れる。淳子の声は徐々に大きくなっていて、体の反応が強くなっていることを示している。やがて、その手を淳子の一番敏感な部分に移すと、それはあえぎ声に変わった。潤一は、その声を聞き、急に淳子を痛めつけたいと思った。いつもの優しい扱いから、一転荒ら荒らしく扱うと、淳子もそれに呼応した。

「私を壊して、壊して、潤」

そう叫んでいた。淳子のいつにない興奮が伝わってくる。潤一の指を淳子の中に入れ、激しく動かすと淳子の身体から驚くほど大量の水分が排出される。だが、もちろん、それで終わるわけではない。休む間もなく潤一のいきりたったものを淳子の中へ入れる。

淳子が、

「ああ」

と短く叫ぶ。潤一は徐々に激しく腰を動かす。

「淳子、好きだ、好きだ」

そう言いながら、そのまま一気に頂点へともっていく、二人の気持ちが一瞬に達したのを確認しながら果てる。

翌朝、早目にホテルを出て、駅前の喫茶店に入る。本当は、この

まままっすぐ会社に出勤したいと、潤一は思っていたが、淳子が、どうしても話したいことがあるというので、立ち寄った。

「どうしたの」

「うん、昨日はいい損なっちゃって」

この人は、その場その場で人種が変わる。そこも魅力的なところかもしれない。今朝の淳子は可愛らしく、純情にすら見える。

「それで？」

「うん、実は来週からアメリカへ行くのだけれど」

「最近よく行くね」

「あのね、私アメリカ人の経営者からプロポーズされているの」

意外な話だった。不思議なもので、昨夜は自分の心の中に淳子を避けようという気持ちがあったのに、淳子にプロポーズした男がいると聞いた瞬間、嫉妬心が生まれる。人間なんて、勝手なものだと思う。

「それで」

「私は潤さんのほうが好きなのはわかっているでしょ」

「いや、アメリカ人の話しは初めて聞いたんだから、わからないよ」わざと意地悪を試してみる、日頃のお返しだ。

「意地悪」

「とにかく、僕の考え方も今後の生き方も、君はわかっているはずだ。今のところ、僕の気持ちに変わりはない。君にも自由がある。

僕は今君のことが好きだ。そして、君も僕のことを好きだと言ってくれる。でも、それは今の話だ。人間だから、今後はわからない。そういう中で、君が今後どんな人生を歩みたいと考えるかだと思う。もちろん、僕は僕で考えるから、君はアメリカへ行って君なりに考えてくればいいじゃないか」

自分でも、妙な屁理屈だと思うが、言い切ってしまった。

淳子は、しばらく俯いていたが、やがて顔をあげ、

「そうね。そうすることにする」

結婚式

あれ以来何度となく渋谷を訪れているが、あのバンドには出会えない。潤一の記憶では、確か2回とも月初めの第一土曜日に行われていたような気がしていたので、その時期に行ってみたがやっていたなかった。

ひよつとして、もう2度と出会えないのではないかという不安に陥る。今日も来て見たが駄目だった。そのまま帰る気にもなれず、わけもなく渋谷の街をうろついている。いつしか渋谷には夜が訪れている。若者の街であり、中年の男が一人で歩くにはふさわしい街ではない。華やかなネオンサインと喧騒。横道に一步入ると怪しげな店が口を広げている。少し先を行くと、そこには若い女の子向けの小さなファッション店舗が軒を連ねている。高校生と思しき女の子たちが、まるで蜂の巣を突つついたように騒いでいる。さらに歩くと、ゲ・センやインタ・ネットカフェがある。バ・チャルな世界は若者達に夢を与えているのだろうか、それとも単に幻想の中に埋没しているだけなのか。潤一のような中年男にとっては、なんだかこの街自体がバ・チャルのような気がしてくる。自分が、そんな中に巻き込まれているような感覚に捕らわれ、潤一は繁華街を急いで駆け抜け、駅へと向う。

自宅へ向う電車の中で、潤一はいつもの自分を取り戻しながら考える。中年男の一人住まいは傍から見れば侘しいものに思われるかもしれないが、実は気楽で楽しいものだ。妻の由美を癌で失ってからずっと一人で暮らしてきている。早いもので、もう5年になる。

あの日、潤一が朝起きてリビングに下りていくと、由美は真っ青な顔をしてソファに横になっていた。

「どうしたんだ」

「ごめんなさい。ちよつと具合が悪くて」

「顔が真っ青だぞ、ちよつとというところではないだろう」

さすがに、その日は会社を休み、由美を病院に連れていった。だが、その時はすでに遅かった。癌は身体のおちこちに転移していて、手

術もできない状態だった。娘の死からまだ完全に立ち直っていないときに、医師からそのことを知らされ、潤一は自分の運命を呪った。結局、妻には癌であることを告げず、一応開腹手術だけはした。由美は入院してからずっとマミのことばかり話していた。由美にとってマミの死がどれほど大きな悲しみであったか、改めて知らされた。由美の場合、最後に手を握って見送れたことだけが救いだった。

あれからもう5年。最初は戸惑うことも多かった一人暮らしも、はじめてみれば楽しいものだった。潤一にとっては、人生初めての一人暮らしである。今ではすっかり慣れて、何不自由ない。強いて心配事をあげれば、今後もっと年をとって病気をしたら、という不安がなくはない。しかし、今は考えないことにしている。その時は、その時だ。もともと楽天家の潤一は、深く考えないようにするのが得意だ。明後日の月曜日は、週一回の大学での講義だ。渋谷から帰り、一人で食事をしながら、講義の内容を考えている。

そんな時、一本の電話が入った。

「もし、もし、宮本先生のお宅ですか？」

若い女の声であるが、聞き覚えのある声ではない。少し警戒する気になりながら、

「はい、そうですが」

と答える。

「あのー、私、東南大学で先生のゼミの生徒だった城野早紀といいます」

「城野・・・？」

潤一は、自分が教えた学生のことについては大体覚えてはいるつもりだが、そうは言っても結構な人数になるので、すぐに思い出せないこともある。頭の中を巡らせる。その時、成績はともかく容姿が派手で目についた一人の学生の姿が目に見えた。

「ああ、あの城野君ね。懐かしいね。元気かい」

「はい、おかげさまで」

城野早紀は、派手な顔立ちと抜群のスタイルで、当時の男子学生た

ちに絶大の人気を誇っていた。男の扱いに慣れていて、どうすれば男が自分のほうを向くかということをよく知っている。そうした自分の武器をフルに活用し、ゼミの活動でも男子学生をうまく使いこなしていた。潤一は大学での仕事を始める時、大木教授から、城野早紀のようなタイプの女子学生には気をつけると言われていた。決して、研究室で二人きりになるなとか、どうしてもその必要性が出たときは、部屋のドアを開けたままでも対応しろというようなことであつた。かつて、潤一の教える大学でも女子学生と問題を起こした教授がいる。もし、潤一がそんなことになって、マスコミ等で騒がれたら、本業に差し支えるので、教えは固く守っていた。しかし、今考えると城野早紀は淳子に似ている。大木教授と河合淳子との関係はどうだったのだろうか。まさか、自分の失敗を踏まえて潤一に話したのではないだろうとは思うが。

「それで、どうしたの？」

卒業して何年もたつ学生からの電話は、再就職の相談がほとんどだが、早紀の場合、実家が幅広く事業を行っていて、就職相談ということはあり得なかつた。

「先生、私今度結婚することになったんです」

「あつそう。それはおめでとうございます。よかつたじゃない」

「ありがとうございます。それでお願いがあるんです。先生にスピ－チをお願いしたいんです」

そういうことか。この時期、よくあることだつた。大学の先生のスピーチは、その肩書きと話の内容が間違いないことから人気がある。学生時代、それほど教師と関係の深くなかつた学生からも、ただ大学の先生というだけで声がかけられる。潤一は講師だから、まだ少ないほうだが、教授クラスになると多くて大変だと聞いている。全て断るわけにもいかず、結婚式の場所等でセレクトすることになるわけだが、選択方法を間違つと、あの人の場合は受けてくれたのに、なんで自分は駄目なのかと文句を言われたりする。それに、列席するとなれば、ご祝儀を包まなくてはならない。それもばかにならない。

い。どうせ引き出物としてもらうものは、タンスの肥やしになるものがほとんどなのだ。

「私が？ 城野君のところなら、大木教授とかのほうがいいんじゃない。話してあげようか」

単に肩書きが必要ということであれば、「教授」のほうがいいに決まっている。それに、早紀はゼミ活動も一生懸命にやっていたとはいえず、潤一との接点もそれほど多くなかった。

「そんなことないです。私、先生のファンでしたから。先生、冷たかったですけどね」

ファンというのは、どういうことだ。大学は勉強するところであり、潤一の指導内容を尊敬するという話であれば、それはそれで嬉しいのだが。いかにも、早紀が言いそうな台詞だった。

「そんなこと言われてもねえ。まあ、しかし、私でいいならスピ・チくらいしてもいいけど」

「ありがとうございます。良かった。これでパパにも報告できます。実はうちのパパ、経営コンサルタントとしての先生のことをよく知っていました、それで先生にお願いしたいと言っていたんです」

「そう、それは光栄だね。とにかく、結婚式の日取りを教えてください」

城野早紀の結婚式は、帝国ホテルで盛大に行われた。潤一が少し早めに会場に入ると、そこには宮本ゼミの卒業生たちがいて、皆潤一のもとへ集ってきた。卒業して、それぞれ違う道を歩んでいるが、学生時代の彼等を知っている潤一にしてみると、社会人になった彼等の変貌振りが面白い。学生時代、いつも汚い身なりしていて、とにかく屁理屈で相手を負かせることを格好良しとしていた畑中由夫が、今ではスーツをビシッと着こなしている。そうかと思えば、学生時代は常に優秀だった中田順平が、就職した大手企業を辞めてしまい、今ではフリ・タ・状態であるという。女の子のほうもいろいろである。すでに結婚していて、子供が二人いる吉岡美恵子、予想もしなかった財務省の役人になっていた木村早苗など、こちらもバ

ラエティに富んでいる。それぞれ近況を報告しあっているのを、潤一は黙って聞いていた。そのうち、今日の結婚式の新婦である城野早紀のゼミ時代の話題になり、「本当はお前、早紀のことが好きだったんだろっ」などと、男同士で盛り上がっている。

「ところで、先生は再婚しないんですか」

突然、山田健太がこちらを振り向き、言った。

「いや、別に考えてないよ」

「そうなんだ。先生もてると思うけどな」

と吉岡美恵子が言う。

「皆様、式場のほうへお入りください」

式場の係りの声に、皆立ち上がりぞろぞろ式場へと向う。

城野早紀は、予想に違わず綺麗だった。新郎は、早紀の父親の会社の営業課長だという。いわゆる逆玉だ。早紀が選ぶだけあって、見た目はいい。ゼミの女性卒業生たちも騒いでいるほど、いい男だ。

潤一のスピ・チも無事終わり、式は順調に進んでいた。早紀がお色直しして再び式場に現れると、一時中たるみだった結婚式が、再び引き締まってきた。早紀が新郎の隣に座ると、司会者が立ち上がり、「皆様、ここで新婦の早紀様の高校時代の友人で、プロのバンドを結成されていらっしゃる白鳥沙織さんに歌の披露をしていただきます。今日はライブがあつたそうで、今駆けつけてくれました。では、どうぞ」

式場の横に小さな舞台のようなものがしつらえてあり、楽器が置いてあつた。だから、誰かが歌を披露するのだろうなとは思っていたが、それがまさか・・・。

式場の後から現れたのは、潤一が探していた、あのソルトレインだった。潤一は驚きと同時に感激していた。ここで会えるとは思わなかった。早紀の結婚式に出席してよかったと思つた。

「早紀さん、おめでとう。そして、新郎の剛さん、どうか早紀さんを幸せにしてあげてください。私が早紀さんと知り合ったのは、高校時代でした。当時、私はいじめにあつていて、いつもひとりでポ

ツンとしていたのですが、そんな私に優しく声をかけてくれたのは
あなただけでしたね。そして、私のために詩を作ってくれました。
その詩を読んで、いつも明るく振舞っているあなた自身も実は色々
なことに傷つき、深い悲しみの底にあったことを知りました。あな
たは、優しい人です。私は、あなたの詩に曲をつけました。あなた
は、泣いて喜んでくれました。そして、その歌を皆の前で歌う機会
を作ってくれたのもあなたでしたね。私の歌を聴いて、皆が元のよ
うに接してくれるようになりました。私の歌手としての原点です。
今日は、その歌を歌います。どうか聞いてください」

早紀は、化粧のことを心配するほど大粒の涙を流していた。ゼミの
卒業生たちも皆涙を流している。潤一は、早紀の全く違う面を知っ
た。ソルトレインの演奏が始まり、白鳥沙織の歌が始まった。彼女
の後のスクリーンに、早紀の作った詩が映し出される。

「美しい黒髪を靡かせて

いつもいつも一人でいるあなた

愛のない言葉に傷つき、棘のある言葉に傷つき、傷つけるための言
葉に傷つき

あなたは羽をむしられた鳥

空を駆け巡り、羽ばたくという夢を

奪ったのは誰

お願い、目の前を見て

まっすぐな道がある

たとえ細くとも、未来につながる一本の道

両脇のみずみずしい草花が

あなたを待っている

着飾った服を靡かせて、いつもいつも皆という私

虚しき日々には傷つき、待つ人のない日々には傷つき、傷つけてくれる

人もいない日々

小さな花へ注ぐ愛情と

同じ位の愛情さえ与えられない

お願い、目の前を見て

臆病な私の前にも

たとえ細くとも、未来につながる一本の道

いつかきつと私と手を携えて

どこまでも進もうよ

早紀の詩と沙織の歌は見事にマッチしていた。場内は深い感動に包まれている。潤一の隣で、吉岡美恵子がボロボロになって泣いている。潤一も、沙織の限りなく済んだ美しい声と早紀の詩に、心から感動していた。白鳥沙織という女性の歌手としての原点を知った。彼女の歌には常に優しさがある。その理由がわかった。潤一の目からも、自然に涙が出ている。

式が終わってから、潤一は沙織のもとへ駆けつけた。この機会を逃がすと、次いつ会えるかわからないと思ったからだ。

「今日は、とても感動しました」

「どうもありがとうございます。早紀の大学時代の先生ですよ。早紀からよく聞かされていました。素的な先生がいるって。でも、全然相手にしてくれないと言ってましたけど」

「そんなこと言ってましたか。全くのウソですよ。ところで、私、実はあなたのことを前から知っているんです」

「えっ、どこかでお会いしてますか？」

今度は、沙織が驚いている。

「いや、私だけが知っていると言ったほうが正確ですね。渋谷で路上ライブをされていますよね。そこで、あなたの歌声に出会いました。以来あなたの、そしてあなたの歌声の大ファンです」

「ありがとうございます。でも、そうだったんですか。私たちのバンドは路上ライブからスタートしていますので、今でも路上ライブは大事にしているんです」

「そうですか。ところで、今日、この後少しお時間いただけますか。お話ししたいんですが」

潤一としては、このチャンス逃がすわけにはいかなかった。

「ええ、でも、ちょっと待っていていただけますか。早紀のところに顔を出してきたいんで」

「もちろん、結構です。ロビーの横の喫茶店で待っていますから」

「はい、わかりました。では、後ほど」

潤一は、2次会を行うというゼミの学生たちと別れて、喫茶店に入る。結婚式に出席した人たちが皆、引き出物を椅子の横において座っている。沙織は、10分ほどで戻ってきた。

「ここ、座っていいですか」

潤一の前の席をさして言う。

「もちろん、どうぞ」

「早紀が、先生によろしくって言っていました」

「そう。彼女今日特別きれいだったよね」

「ええ、早紀はいつもきれいです。私と違って」

「いや、沙織さんもきれいですよ」

私の娘に似て、という言葉は飲み込んだ。実際、沙織は娘に似ていた。沙織は路上ライブのときと同じように、今日もジーンズだ。ブルークン加工のデニムで、上は胸元に蝶のモチーフがあるニットキヤミソールにジャケットだ。そこがまたいい。結婚式だからといって、ドレスを着ていたんでは、今日のあの歌は似合わない。

「ソルトレインの大ファンとしては、今日は城野君に感謝だな。いや、こうしてあなたに直接お会いできるなんて、夢にも思わなかった」

「そんな、私達それほど有名ではありませんし、そんなにおっしゃられても、かえって困ってしまいます。大変嬉しいですけど」

「僕は有名かどうかなんて、全く関係ないと思っているんだ。その人の歌が、自分の心にどれだけ響くかどうかだけです。沙織さんの歌は、ものすごく心に響きます」

「ありがとうございます」

「それで、お聞きしたかったんですが、路上ライブはいつも決まっ

た日にやっているのですか？」

「いえ、できればそうしたいんですけど、なかなかそうもい cannot なくて。全くのイレギュラ・なんです」

「そうですか。やはり劇場ライブが中心ですか」

「そうです。一応プロなものですから、劇場ライブが中心になります」

「劇場ライブは、やはり若い人が多いのでしょうか？」

「ええ、どうしてもそうなってしまうですね」

「そうか、私みたいな中年の男はいないよね」

「うーん、少ないです」

「気を遣わなくてもいいよ。本当はほとんどいないんですよ」

「はい、では正直に、いません」

「この間CD買ったんだけど、ほかのCDも買いたいので、送ってくれます。お金後でお渡ししますのです」

「ありがとうございます。お金は後で振り込んでいただければ結構です」

「でも、やはり生が聞きたいな」

「一度劇場にも来てくださいよ。劇場によつては、比較的客層の年齢が高いところもありますから、その時ご案内します」

それからしばらくたって、沙織から何枚かのCDと一緒に劇場ライブの招待状が届いた。潤一はちょっと不安もあったが、ライブに行くことにした。その当日、潤一は朝からそわそわしていた。

「社長、今日は変ですよ。いつになく落ち着かない感じで。ひよつとして新しい彼女でもできたんじゃないですか」

営業の笹原が、いつもの大きな声で言う。まったくこいつは、仕事以外で無駄にでかい声を出すんじゃないよと、心の中で毒づく。しかし、その声に一番反応していたのが、内山久美だった。久美は、じつとこちらのほうを見ている。誤解だ。

「何言っているんだ、今日は知り合いのコンサートがあつて、行かなくてはならないからだよ」

「そうですか。なんちゃって、本当は、その歌手とかいうのが、新恋人だったりして。淳子さんのいない留守に、社長も結構やりますね」

「またもや余計なことを言われ、おかげで久美の強い視線を感じなければならぬ」

「ソルトレインのことは、まだ会社の人間には一切言っていない。だから、皆に勘違いされてしまう。下北沢のあまり大くない劇場でライブは行われた。その日は全部で3組のバンドが出演した。若い人たちの熱気と、興奮が演奏者たちにも伝わり、各バンドともハイテンションでライブは盛り上がった。ソルトレインも、路上ライブとは違って、ロック調のものかなり入れている。それはそれでまた楽しいのだが、なにせ中年の男にとっては、長時間いられない環境であつた。とにかく疲れるのだ。ソルトレインの演奏が終わったら、すぐに外に出た。酸素を大きく吸い込んで、ようやく生きた心地がする。やはり、中年のオヤジに、劇場ライブは向かない。だが、潤一はますます沙織のファンになっていた。なんとかして、沙織と一対一で会う機会を作れないものだろうか。仕事をしながら、いつも頭の中では、その事を考えていた。だが、その機会は沙織のほうから提供してくれた。土曜の夜に家で寛いでいると、沙織から電話が入った。

「あのー、白鳥ですけど」

「どうも、どうしたの」

「明日の日曜日はお時間とれますか」

「うん、大丈夫だよ」

「ライブの件でお願いがあるんです」

「いいよ。どこで会う」

「ええと、私明日は代官山に行っているんですけど」

「代官山だったら、“フロ・ラル”知っている？」

「あのスイーツのおいしい店ですか」

「そう。あそこでもいい？」

「ええ。ひよつとしておいしいスイーツご馳走になれるんですか？」
「もちろん」

フロ－ラルは若い女性に人気の店で、いつも混んでいる。約束の午後4時より30分も早く潤一は店に着いていた。やがて、沙織がやってきた。

「あつ、早いですね。お待たせしましたか」

「いや、混んでると思ったんで、早めにきてただけだよ。とにかく座って」

沙織の用件というのは、また劇場ライブがあるのだけれど、今回はチケットが余ってしまったので、協力をお願いできないかということだった。沙織はミルフィ－ユ、潤一は苺のタルトを食べながら話しをする。まるで恋人同士だななどと思っているのは、潤一だけである。

「大丈夫。そんなことならお安い御用だ。僕が全部買ってあげるよ。うちの会社の若い子たちに、君の歌声を聞いてもらいたいし」

「ありがとうございます。でも・・・」
「いいにくそうである。」

「どうしたの？」

「あのー、15枚もあるんです。だから、買ってくれそうな人を紹介してもらえればと思ってきました」

ちよつと驚いたが、どうということはない。彼女の役にたつのであれば、何でもしたい。恐らく、娘にもこういうことがあったんだろうなと思う。娘にしてやれなかったことを後悔する。

「OK。全部引受けるよ。心配しなくていい」

「そんな・・・」

「なんで。僕は君の大、大、ファンなんだ。それくらいさせてよ」
沙織は、ちよつと考えていたようだったが、明るい顔になって、

「ありがとうございます。では、今回はお言葉に甘えることにします。本当のところ、とっても助かります。なぜだか、今回は売れ残りが出てしまって、困っていたんです。たまに、こういうことある

「んですよ」

「いつでもうまくいくとは限らないさ。今回に限らず、ライブがあるときは毎回知らせてね。僕はいけなくとも、うちの会社の子たちに行かせるから」

「なんだか、すみません」

沙織の用件はそれで済んだのだが、今日はオフの日でまだ時間が空いているというから、

一緒に食事をすることにした。沙織からすれば、本当は帰りたくても、15枚もチケットを買ってもらった手前、帰るわけにもいかない。潤一もそれがわかっていて、誘った。経営コンサルタントであるから、そういうところは抜け目がない。食事をするころには、沙織もかなり打ち解けてきていて、会話はよりスムーズになっていた。そろそろ食事も終わりだ。このまま返したくないという欲望が、潤一の中に生まれた。

「この後、軽く1杯つきあってくれる？」

やや、強制的な言い方になっていないか気をつけたはずであるが、大丈夫だろうか。しかし、1杯付き合えという言い方がオヤジっぽいと自分ながら思う。しかし、他の言葉が思い浮かばない。駄目だなあ。

「ええ、いいですよ。私も飲みたいと思ってましたから」

明るい声で返事をもらったが、本当だろうか。つい、裏のことまで考えてしまう。しかし、チャンスだ。だが、いったい何のチャンス。彼女の帰りのことも考え、JR恵比寿駅に移り、潤一のたまにいくバ・に沙織を誘った。

「ごめんね。なんだか僕のわがままにつき合わせてしまっ」

「とんでもないです。嬉しかったです。本当は、私も先生とお知り合いになりたかったの」

「なんで？」

「私、事情があって高校しか出てないでしょう。今ごろになって、大学へ行っておけば良かったなと思ってるんです。大学って、いろ

いろんなことをじっくり勉強できるところじゃないですか。だから」

「今は、どの大学でも社会人入学を認めているよ」

「そうなんですよ。でも、今は仕事が忙しくていけそうにないんです。だから、大学の先生と知り合いになれば、大学へ行った気分になれるでしょ。それで、先生と知り合いになれば嬉しいな、なんて思ってたりのしたの」

「だから、僕と会ってもいいかなと」

「もちろん、それだけじゃないですよ。でも、それはいいじゃないですか。先生が私のファンでもあるし。ファンは大事にしないとね」
なんかはぐらかされてような気もするが、自分はいったい何を望んでいるというのだ。

「そうだよ。こんな中年のオヤジのファンなんてめったにいないんだから、大事にしてよ」

「はい」

それからライブの度に、潤一と沙織は会っていた。二人が会う正当な理由は今のところ、それしかなかったから。潤一は、ライブの度に大量のチケットを買った。そして、それを会社の若い子たちに配った。実際に、皆見に行ってくれたようで、社員の中にもファンができた。それは、潤一にとっても嬉しいことだった。沙織とも何度也會ううちに、さらに親しくなっていた。その中で、自分の娘もバンドをやっていたこと。その娘が交通事故で死んでしまったことも話していた。

「そう。かわいそう、彼女」

そう言つて、しばらく黙っていたが、

「じゃあさあ、私が娘さんの代わりをしてあげる。ね、お父さん」

「やめよう。お父さんはさすがに・・・」

「冗談よ。お父さんなんて呼ばないわ。潤一さん」

「それがいい、それがいいよ。先生って呼ばれるのもいやだしね」

「それでいいの。じゃあ、私のことも沙織って呼んで」

「わかった」

そうは言ったものの、お互い妙に気恥ずかしくて、なかなか言えなかった。でも、やはり女の子のほうが対応は早い。いつの間にか、彼女のペースでお互い、そう呼び合っていた。

チケットを会社の人間に配ったことで、潤一がソルトレインに肩入れしていることが公になった。最初は、社員たちも社長が突然始めたことにあっけにとられた感じで眺めていたが、そのうちどんどんエスカレートするので、何事かと心配する向きまで出てきてしまっていた。

「社長、何でそんなに熱心なんですか」

常務の大黒に聞かれる。大黒は、潤一とほぼ同じ年代の男である。そんな彼にしてみれば、狂ったとしか見えないのだろう。

「君にはわからないよな。彼女の歌の良さが」

大黒は、もともと音楽に全く関心を示さない男だ。だから、もちろん、チケットも渡さないし、聞きにも行っていない。この男の趣味といえば、ゴルフしかない。その代わり、ゴルフだけは玄人裸足だ。「それに、彼女は私が教えている大学の教え子の親友なんだよ」

「そうなんですか、それでね」

こんな男には、そう答えておくのが無難だ。だが、内山久美だけは、潤一の気持ちがわかってはいるはずだった。今の会社で娘のことを知っているのは、久美だけだから。だから、彼女には敢えて何も言っていないが、わかってくれているものと信じている。久美のほうも好意的で、ライブにも行ってくれている。久美にしてみれば、潤一が淳子に深入りするよりも、ずっといいと思っっているのだろう。

しかし、劇場ライブに行かない潤一には、沙織の歌を聞く機会は極めて少ない。たまに渋谷で行われる路上ライブにはなるべく仕事をやりくりして行っているが、せいぜい月1回程度である。そこで、会社の忘年会などの行事の際に、呼ぶことにした。若干公私混同のきらいもあるが、その頃には社内でもかなりのファンができていたので、抵抗もなく行われた。本当は、社長の個人的理由なのであるが。

メジャ・デビュー

潤一のソルトレインへの肩入れは、以前にも増していて、社員からはある種のスト・カ・だと揶揄されていた。しかし、潤一は、それでも満足していなかった。もっとソルトレイン・沙織のサポートができないかと常々考えていた。

そんな時、たまたま本屋で雑誌を立ち読みしていたときに、友人の音楽評論家谷口正雄の記事を見つけた。すっかり忘れていたが、谷口正雄なら力になってくれるはずだ。もともと谷口とは、仕事を通じて知り合ったのだが、今では飲み友達の一人になっている。しかし、潤一の仕事が忙しくなったこともあり、しばらく会っていないので、その存在を忘れていたのだ。もっと早く彼の存在に気付けばよかった。早速、事務所に電話して見ると、運良く本人がいた。「はい、谷口です」

相変わらず無愛想な声である。会って話しをすると楽しい男なのだが、電話は無愛想極まりない。

「宮本です。ご無沙汰」

「ああ、どうも。誰かと思ったよ。すっかり連絡なかったね」

「仕事が忙しくて、なかなか連絡もできず、失礼した」

「ところで、今日は何」

「実は、僕が今すぐく気に入っているバンドがあるんだけど、そのバンドをメジャ・デビュー・させたいんだ。それで、なんとしても君の力を借りたいと思って」

「わかっていると思うが、そんな簡単なものじゃないんだ」

「それはよくわかってるよ。でも、とにかく君に聞いてもらいたいんだよ」

「うーん、君の頼みじゃしょうがないか。とりあえずCDを僕のところへ送っておいてくれないか。すべてはそれからだ」

評論家としての、この男の実力はたいしたもので、雑誌に書いている評論を読んでも、この男は凄いなと思う。だから、潤一としては、

この男のお眼鏡にかなうかどうかで、ソルトレインの将来も決まると感じていた。言われたとおり、すぐにCDを事務所に送った。

だが、1週間たっても何も言っていない。潤一は、子供の受験結果を待っている親のように、不安な気持ちでいっぱいだった。だが、こちらから催促するのは躊躇われた。それからさらに1週間がたった土曜日の午後に谷口から電話があった。あまりに長い間連絡がなかったので潤一は半分諦めていた。だから、内田久美から、谷口から電話だと聞いたときも、覚悟はしていた。

「はい、宮本です」

「ああ、谷口だ。すまん」

“すまん”なんて言うな。どうせ駄目なら駄目とはっきり言ってくれと思ったとき、谷口は意外なことを言い出した。

「いや、すまん。実は急な仕事が入ってしまって、フランスへ行っていた。だけど、CDはちゃんと聞いたよ」

「あつ、そうなんだ。それで」

「それでね、案外いいんじゃないかと思う」

この男が「案外いい」などというのは、誉め言葉だ。それを知っているだけに、潤一は小躍りした。だが、それを悟られないようにするのに苦労した。

「そう・・・かな」

「うん。特にボ・カルの女の子の声がいい」

沙織のことを言われ、自分のことのように嬉しい。

「それでね、エイジング社の人間を紹介しようと思う」

「えっ、あのエイジング社？」

企業としてはまだ新しいほうであるが、今、一番ヒットメ・カ・を抱えた音楽会社である。

「不服か」

「いや、逆に、エイジング社で相手にしてくれるかなと思って」

「自分で紹介しておいて、それはないだろう。俺としても相手にされないようなレベルのバンドは紹介しないよ。俺が恥をかくだけだ

「からな」

「それはそうだよな」

「それでだ。一度君がバンドのメンバーをつれて俺の事務所に来てほしい」

「わかった。ありがとう」

「ただ、事前に言っておくぞ。まだ、デビューと決まったわけでもないからな。一歩前に進んだだけだ。そのところ、メンバーにもよく伝えろよ。どうもさっきからの君の電話での応対を聞いていると、君自身が一番勘違いしていそうだがな。いったいどうしたんだ。そんなに入れ込んで」

「そんな風を感じるか」

「わかりやすいくらい、表に出ている」

「そうか・・・」

「はっ、はっ、はっ、はっ、はっ、はっ」

谷口の笑いがずっと続いている。

「そんなに笑うな」

「笑うよ。仕事以外でそんなに一生懸命な君の姿を見たことなかったからな。まるで中学生だ。ひょっとして、ボ・カルの子に惚れちゃったんじゃないだろうな」

さすが評論家は鋭い。

「何を言っているんだ。そんなわけないだろう。君も知っているように、うちの娘とダブってしまったもんだから、なんとかしてあげたいって思うんだ」

「それはわかるが、本当にそれだけか。まあ、いいや、そのころは俺には関係ないことなので」

銀座の寿司屋のカウンターに、沙織と並んで座っている。沙織にとっては久振りの寿司らしく、さっきから嬉しそうに寿司を注文している。

「お酒飲まないの」

「うん、飲むけど。食べたい」

と、どうやら今日は飲むことより食べることに集中したいらしい。そんな彼女が可愛いと思う。沙織が寿司を食べるのが一段落したのを見て、潤一が話しかける。

「ところで、今日は話があるんだ」

「話し？そんなの聞いてないよ」

最近では、すっかり打ち解けていて、こんな会話をするようになっていた。

「うん、電話では言っただけ」

「改めて話なんて言われると怖いな」

それほど恐がっているとは思えない。だから、からかう。

「本当に怖い話なんだ」

と真面目な顔をして言う。

「えっ、まさかソルトレインのサポートはもう止めるとかいう話し」
沙織も真剣な顔になり、聞いてきた。

「そう思うか？」

「わからない。でもあり得ると思う。だって、潤さんの応援はちよつと度が過ぎるって思うもの。私は嬉しいけど。あまりにエスカレ・トすると、会社とかで潤さんの立場が悪くなると思うのね。私はすごく嬉しいけど、だからこそ心配もしているの。いつか潤さんは私たちのサポートから手を引くって、うちのメンバーが言っているんだ」

「沙織もそう思っている？」

「そうなってほしくないけど。潤さんのことと思うと・・・」

軽くからかって見るつもりだったが、思わぬ方向に行ってしまったている。そろそろ軌道修正しなければならない。

「そんなことあるわけじゃないじゃない。僕はそんな中途半端な気持ちで応援してないよ。違うんだ、話というのは」

「そうなの。ひどい、潤さん。本気にしちゃった」

泣きそうな顔になっているので、早く本題に移らなくてはならない。

「あのね、僕の友人で音楽評論家の谷口正雄という男がいるんだ」
「谷口正雄？」

「どうやら沙織は知らないらしい。」

「知らない？」

「知らない」

「そうかも知らないな。音楽評論家といってもジャンルごとにいっぱいいるし、分野が違つとわからないかもね」

「うーん、私、そういうの勉強していないから。恥ずかしい」

「そんなこと気にしなくていいよ。それでね、実はその男にソルトレインのCDを聞いてもらったんだ」

「ふーん」

あまり関心を示さない。

「その返事が昨日きたんだ」

「それで？」

「それで、とてもいいと」

ちよつと嘘をついた。本当のところは、案外いいと言っていたのである。しかし、あの辛口で有名な谷口正雄が、“案外いい”と言うのは、とってもいいと言っているのと同じ意味だから、あながち間違つてはいない。

「しかも、君のことが気に入ったらしい」

「ふーん」

ここでも、あまり強い関心を示さない。

「それでね、彼がエイジング社を紹介すると言っているんだ。メジヤ・デビューのチャンスだと思う。この話し、前に進めてもいい」
エイジング社という名前には反応した。

「そう、ありがとう。潤さんの応援、とても嬉しい。でも、この話しはちよつと待ってほしいの。私だけじゃ決められないし、皆の意見を聞いてみたいの」

意外に冷静な反応だった。谷口のいうように、一番浮かっていたのは、自分かも知れないと反省する。

「それはそうだね。君の一存で決めるわけにはいかないんだよね」
結局、その日は中途半端な盛り上がりで終わった。

メンバ -

「ねえ、ライブ終わったら話したいことがあるんだ。“花の籠”に集合してくれる」

沙織は、潤一からの話しを伝えるため、メンバ - を集めた。花の籠というのは、居酒屋で、メンバ - が反省会と食事を兼ねてよくいくところである。

「おお、いいよ」

タケシが答える。

「何、何？ 沙織っちが結婚するとかって言う話し」

ケン は 相 変 わ ら ず 軽 い ノ リ だ 。

「何言ってるの、ケンたら。そんなわけないでしょ。とにかく終わってから」

「分かったよ」

ライブが終わり、沙織が着替えて「花の籠」に行くと、二人はすでにビールを飲んでいた。

沙織の姿を見つけると、タケシがこちらに向って手をあげながら言う。

「おう、先にやっているよ」

ケンは沙織のほう見ながら、無言で飲んでいるビールを軽くあげる。沙織が到着したところで、とりあえず再度乾杯をする。しばらくは、ライブの反省会を行う。今日は沙織のノリが悪かったと、二人から責められる。ライブの途中で、これから話すことを考えたということはないのだけれど、ずっと頭をよぎっていたことは確かだ。それが出てしまうのだろう。恐ろしい。

「ところで、話して何？」

タケシが聞いてくる。沙織はなかなか話しを切り出せない。前にも似たような話しがあって潰れているからである。レコード会社を紹介

介するからと言われ、行ってみたらケンモホロ口だったり、紹介された人に全然権限がなくメジャ・デビュ・にはほど遠かった等々である。

「あのね、宮本さんいるじゃない？」

当然、宮本のことは皆知っている。

「うん」

「宮本さんの友人で、音楽評論家の谷口正雄という人がいるんだって」

「谷口正雄、知ってるよ」

ケンがすぐに答える。

「桑田亮二とか、エックスなんかの評論で有名じゃん」

さすが、メジャ・デビュ・を指摘しているだけあって、業界事情には詳しい。

「それで？」

ケンの言ったことは無視して、タケシが聞いてくる。タケシが谷口正雄のことを知っていたかは不明であるが、ケンの反応が気に入らなかったことは確かだ。

「その人に、宮本さんがソルトレインのことを話して、CDを聞いてもらったらいいの。そうしたら、とてもいいって。でね、エイジング社を紹介するって言うらしいの」

「止めとけ」

即座にタケシが答えた。

「なぜ？」

「なぜって？。言わなくてもわかるだろう。今まで似たような話でどれだけ振り回されたか。どれだけ騙されたら気が済むんだ。宮本さんの話だからって、そんなのはまた騙されるに決まってる」

「あの人は、そんな人じゃないわ」

沙織は声を荒げていた。自分でも驚くほど無意識に大きな声が出ていた。その時、沙織は潤一のことを好きであり、愛していることに気付いた。というより、そう思わないように自分の心の中に封印し

ていたものが、タケシの一言で表に出た。

「俺はいいと思うけどな。谷口正雄の話しだったら間違いないと思うし、メジャ・デビュ・のチャンスだと思う」

どこまでもメジャ・志向のケンにとってはチャンスに思えるのだろう。ケンの話しはまだ続く。

「でもさ、何で宮本さん、沙織っちに力入ってるんだろっね。ひよっとして、宮本さん、沙織っちのパパだったりなんかして。できちゃってるんじゃないの？」

と軽いノリで言う。沙織が反論する前に、タケシがケンの胸倉をつかんでいた。

「お前、言っていていいことと悪いことがあるんだぞ。ぶっ飛ばすぞ」
体格ははるかにタケシのほうがいい。沙織は、タケシが自分に好意をもってくれていることは前からわかっていた。だから、タケシはケンの発言に怒りをぶつけた。本当は、自分も疑問に思っていたことに違いない。もちろん、“できてはいない”が、沙織の潤一に対する気持ちをあてられたような気がして、沙織は何も言えなくなっていた。

「ごめん、ごめんよ。軽いジョークだよ」

胸倉をつかまれたまま、ケンが答える。

「バカヤロ、いい加減にしろ。お前はいつもヘラヘラ、何でも言いすぎる。冗談って言えば済むと思ったたら大間違いだぞ」

タケシの凄い剣幕に、ケンがすごすごと謝る。

「わかったよ。気をつけるよ」

しばらく沈黙が続いたが、再びケンが唇を切る。

「でもさ、いい話したと思うけどな」

「そんなにやりたけりゃ、お前たち二人でやれよ。俺は降りるからさ」

「そんなことできないわ」

沙織がすぐに答える。実際のところ、ソルトレインはタケシがいるからもっている。タケシが抜けたら、ソルトレインそのものが存立

できない。沙織が続ける。

「とにかく、谷口さんと言う人が一度会いたいと言っているの。会って話を聞くだけでも聞いてみない？」

「そうだよ。話を聞いて怪しい感じだったら断ればいいじゃない」
二人の話しを聞いていたタケシも、少し落ち着いて考えたようであり、しづしづ了解した。

谷口との会合は、彼の事務所で行われた。3人揃って事務所の応接間にいるが、こういう席になると、いつもはふてぶてしいタケシが一番緊張する。さつきから急に無口になってしまい、横にいる沙織にもその緊張が伝わってくる。その点、ケンはずっと緊張感がなく、キヨロキヨロと辺りを見回している。そんな二人を見ているとおかしくなってしまう。

会合には、もちろん、宮本潤一も参加して行われたが、終始なごやかな雰囲気の中で、スムースに進んだ。谷口は潤一と親しいせいか、ソルトレインにもとても好意的で今回のことについても、丁寧に説明してくれた。谷口の話しによれば、エイジング社は今度新鮮なバンドを求めているところであり、谷口の親しい専務を通して邦楽部門の責任者である横山という部長にすでにCDは渡っているとのこと。しかも、その邦楽部長のほうでぜひ会いたいと言ってきているとのことである。話しの流れからして、谷口はその邦楽部門の責任者ともかなり親しいらしい。

「そういうわけで、話しはいい方向に進んでいる。こんなことは珍しいことなんだけど、横山君のほうが乗り気なんだよ」

あれほど来るのを渋っていたタケシの顔がほころんでいる。本当は誰よりもメジャデビューを望んでいるのは、タケシなのかも知れないと沙織は思う。

それから3日後、エイジング社の邦楽部長横山のところへ行った。ここでも谷口と一緒に来てくれたせいか、とても歓迎された。もちろん、スタジオで生の演奏もし、聞いてもらったが、横山は「とてもいい」と言ってくれた。ここから話しはとんとん拍子に進み、

あつという間にメジャ・デビューが決まった。

その日、沙織は潤一への報告も兼ねて会うことにした。ここしばらく、ライブのほかにメジャ・デビューのための準備などもあり、潤一には会えなかった。銀座で食事をした後、六本木にある静かなバに移り、向かい合って飲んでいる。

「潤さん、本当にありがとう。ここまでこれたのは、潤さんのお陰です」

「どうしたの。そんな神妙な顔しちゃってさ。なんか嫁にいく娘がお父さんに挨拶しているっていう感じだよ」

「だって、ここはちゃんとお礼を言っておかなければと思って」

「そんなのはいいよ。僕の力というよりも、やっぱりソルトレインに実力があつたからだよ。ソルトレインは本当にいいよ。特に沙織の歌声がね」

「ありがとう。嬉しい。でも、実力があつてもメジャ・デビューできないバンドはいくらでもあるもの。やっぱり私は潤さんのお陰だと思っっているわ」

沙織の声が湿っぽくなりはじめた。潤一は何かを言っ、雰囲気を変えなければならないと思うが、言葉が浮かんでこない。

「でも、なぜ潤さんはここまで私達をサポートしてくれるの？それは、私のことが娘さんとダブっているから？」

「最初はそうだった・・・」

「最初は？」

「うん」

「じゃあ、今は？」

「もちろん、ソルトレインというバンド自体が大好きだからだよ」

「それだけ？」

“それだけ？”と言われると、答えに窮する。本当は違う理由も含まれていることは、自分でもわかっている。だが、それには触れてはいけないと思うから、心の中にしまっている。だから、潤一は沙織の質問に答えられない。

「私も同じだった」

沙織がポツリと言った。

「私も同じ？」

「私もね、小さい時父を亡くしたから、潤さんにお父さんをダブらせていたの。優しいお父さんってこうなんだろなって、いつもそう思ってた。でも、今は違うわ」

「今は？」

今度は潤一が聞く番だった。

「今は、あなたのことが好き」

“今は、あなたが好き”

聞いてはならないことだった。

「あなたは、今でも私を娘さんの代わりだと思っているの？」

沙織に初めて“あなた”と呼ばれた。そのことに動揺していた。

「いや、そんなことはない」

「じゃあ、何」

「僕も君のことが好きだ」

言ってはならないことだった。親子ほど年の離れている潤一に、彼女を幸せにできる自信はない。だが、沙織のあまりにまっすぐな愛情表現に、潤一も嘘はつけなかった。

「嬉しい」

そう言って、沙織は俯いた。その頬に涙が一粒浮かんだ。でも、すぐに顔をあげ、明るい声で言った。

「ねえ、潤さん、明日お休み？」

「うん、そうだよ」

「そうしたら、鎌倉に行かない」

「えっ、鎌倉？」

「そう、鎌倉」

「なんで、鎌倉」

「なんでもいいでしょ。私が行きたいの。行ってくれるの？」

「うん、いいよ」

鎌倉の旅

沙織が突然鎌倉へ行きたいと言い出したのには驚いたが、嬉しくもあった。どうせ出かけるのなら、もっと遠くへ行きたいと思ったが、お互い今は忙しいので無理だった。でも鎌倉なら日帰りで行ける。考えて見ると、妻を亡くしてから女性と旅に出かけたことは一度もなかった。淳子を始め、これまでも何人かの女性と付き合いはしたが、そういう機会はなかった。というより、潤一が意識的に避けていたといったほうが正しい。もっとも鎌倉へ行くのは、旅とは言えないかもしれないが。

沙織とは、東京駅で待ち合わせをし、JR横須賀線で鎌倉駅へ到着した時は、11時半になっていた。季節はずれのせいか、それほど込んではいなかった。沙織は、長谷寺とか鶴岡八幡宮といったあまりに有名なコースではなく、こじんまりした社寺が並ぶ落ち着いたコースを選んでいたようで、西口を出た。

「ねえ、散策する前に、まずは昼食食べない？」

そう言ったのは、潤一のほうだった。

「えっ、いきなり食事するの？ でも、そのほうがいいかもね。この先食事をするところは少なくなってくると思うし」
とガイドブックを見ながら沙織が言う。

「よかった。実は朝から何も食べていないので、腹ペコなんだ」

「はいはい、わかりました」

改札口を出て、7分ほど歩いたところにある会席料理の店に入る。

「吉亭」というその店は、緑に囲まれた和風の館で、周囲の喧騒さから解放された清々しさがあった。お勧めといわれるミニ会席をオーダーする。色も形も多彩な器を使用していて、9品もの本格的な料理を味わうことができた。

「おいしいね、潤さん」

「うん、おいしい」

「でも、潤さんはいつもおいしいもの食べているから、感激しない

か」

「そんなことはないよ」

なんか自分だけ贅沢していると言われた気がして、つい語気が強くなってしまった。

「怒らなくても・・・」

「ごめん。怒っているわけじゃないよ。でも、この器いいね」
話しを変える意味で小鉢をとりあげて言った。

「私もそう思っていたの。備前焼とか有田焼でしょ」

ゆつたりとした店なので、つい長居をしてしまい、店を出た時には午後1時になっていた。

「じゃあ、潤さん、行くわよ。歴史の旅へ」

「歴史の旅か。沙織は歴史が好きなの？」

歩きながら会話する。

「いや、そうでもないんだけど」

「じゃあ、何で鎌倉を選んだの」

「それも深い意味はないの。でもね、前に一度潤さんから鎌倉の話を聞いたことがあるから」

「えっ、そうだっけ」

そう言われて見れば、すっかり忘れていたが、鎌倉は独身時代に由美と一度来たことがあり、その時の話をしたような気がする。

「奥さんと来たんでしょ」

やっぱりそうだったのか。どんな時にそんな話をしたのか、潤一は覚えていないが、沙織はしっかり覚えていたのだ。

「うん、そうだけど・・・」

「だから、私との思い出もここで作ってほしいと思って。でも、これって奥さんに対抗しようとかって意味じゃないからね」

「うん、わかってるよ」

とそう言うしかない。

「はい、ではまず寿福寺に参りますので、お客様私についてきてくださいね」

とガイド口調で言い、さつさと先を歩く。ボツとして後をついて来ない潤一のもとへ戻って、手をつなぐ。

「こうしないと駄目なんですよ」

軽いノリの振りをして手をつなぐ。潤一はどきまぎしてしまう。いい年をして、沙織の方が上手だと思う。

「寿福寺って、北条政子のやぐらがあるって知ってる？」

「うん、頼朝のやぐらもあるよ」

「なんだ知っているのか。つまらない。前にもここ来た？」

「いや、前には来ていないけど知っていた」

「さすが、大学の先生」

と手をつないでいない右手で潤一のわき腹を突つつく。寿福寺は、鎌倉五山中三位の寺で、古木に覆われた総門から続く参道を歩き、裏山にある寿福寺の墓地へ抜けると、鎌倉特有のやぐらが見られる。そこには北条政子や源頼朝のやぐらがある他、作家の大仏次郎や高浜虚子といった文人のやぐらもある。二人でやぐらをじっくりと見ていたが、沙織が突然言い出す。

「潤さん、今度奥様と娘さんのお墓参りに行きたいな」

「うん？」

聞こえてはいたが、“なぜ”という意味で言った。

「だって、これからは奥さんと娘さんの後を私が引き受けることになると思うから」

沙織はそこまで気持ちが固まっているということなのだろう。こういう面でも潤一より先を歩いている。潤一のほうはまだそこまで覚悟が決まっていはいない。それは100%沙織を幸せにできる自信がないからだ。

「そうだね」

としか言わなかった。

寿福寺から次の訪問先の英勝寺までは5分ほどで行ける。沙織は駅の売店で買った使い捨てカメラで盛んに写真を撮っている。それは風景だけでなく潤一の姿も撮っている。潤一もカメラをとりあげ沙

織を撮る。そのうち、沙織は二人並んだ写真が撮りたいと言い出す。英勝寺へたどり着いた時、ちょうど中年の夫婦がいたのを見つけ、沙織が写真をとってほしい旨を話す。幸い、快く応じてくれた。山門の前に二人で並ぶ。沙織が潤一の腕に手を巻きつけてくる。拒否するわけにもいかず、そのまま受け入れる。なんとなく気恥ずかしい。それは写真を撮ってくれている夫婦に対してである。この夫婦に自分達はどのように映っているのだろうかと思うと気恥ずかしくなる。

「はい、チーズ」

今はあまり言わないと思うわれる夫婦の合図でシャッターが切られた。

「ありがとうございます」

沙織が走ってカメラを撮りに行く。嬉しそうな顔で戻ってきた。

「やったね。これで証拠ができた」

「証拠？」

「そう、証拠。もう逃げられないぞ」

「あつはつはつは。おもしろい。ちょっと照れくさかったけど、そんな証拠ならいつでもいいよ」

「ほんと？」

「ほんとだよ」

「じゃあ、今度はキスしているところを撮ってもらおう？」

「いや、それは勘弁だな。そんな度胸はないよ」

「臆病者」

と沙織がおどけて答える。

英勝寺は寛永年間、徳川頼房の准母英勝院が創建。以来、近年まで水戸徳川家の姫君が住持した鎌倉唯一の尼寺で、仏殿、鐘楼、祠堂などの建築様式は江戸初期の名刹だ。その後、浄明寺まで足を伸ばす。清楚な境内には、日壁と釣り鐘型の火灯窓が調和した不動堂庫裏、梵鐘などが整然と並ぶ。

浄明寺を出たところで少し疲れたので休もうということになり、

民家を改築したような喫茶店に入る。季節外れのせい、客は自分達2人だけだった。注文したコ・ヒ・を、店主と思われる50代の男性が持ってきたが、その後店の奥へと消えてしまった。気を利かせたつもりなのか、それとも次の客が来るまで奥で待っていることなのかは分からないが。

まるで二人で生活している部屋にいるような感覚に陥ったのは潤一だけではなかった。

「ねえ、潤さん、なんかここって自分達の部屋みたいな感じしない？」

「うん、そうだね」

「でね、潤さん、落ち着いたら一緒に住みたいな。じゃないと、お互い忙しくて全然会えないんだもん」

潤一もできればそうしたいと思った。しかし、今のマンションは由美との思い出があまりに詰まっているから無理だ。もし、沙織と一緒に暮らすとなれば引越さねばならない。そういう時期になったのかもしれない。

「うん、僕もそれは考えていた」

「嬉しい、良かった」

「でも、沙織は後悔しないのか」

「後悔って？」

「沙織はまだ若い。いくらでも違う人生を歩める。もっと違うパトナ-を選ぶ」

「それは年齢のことを言っているの」

「まあ、年齢だけではないと思うけど」

「そんなことだったら、最初から潤さんのこと好きになっっていないわ。止めて、そんなこと言うの。悲しくなるわ」

「わかった」

沙織は急に黙り込んでしまった。喫茶店にしては音楽もかかっているないので、まるで部屋の温度が下がったかのように静寂が広がった。潤一は話の接ぎ穂が見つからず、窓の外を見る。すでに夕陽が空を

染めていて、喫茶店の周囲にも夕暮れが迫っていた。窓から見える小さな庭の草木が風に微かに揺れている。沈黙を破ったのは、沙織のほうだった。

「潤さん、私、潤さんのこと死ぬほど好きよ。愛しているといったほうがいいのかもしれない。愛は対等なものよ。恋はいつも、好きということのウエイトが違うじゃない。相手よりも自分のほうが好きだったり、逆に相手のほうが自分のことを好きだったり。でも、愛はいつでも対等なの。だから、年齢なんて関係ないの。そうでしょ、潤さん」

言われて見れば、二人の関係は最初から「愛」だったのかもしれない。もちろん、好きという感情もあるけれど、やはりそれは愛と呼ぶほうがふさわしいのかもしれない。

「沙織の言うとおりかもしれない。沙織、僕は約束するよ。これからずっと沙織を愛し続けることを」

沙織の目から涙があふれた。

「ありがとう」

それだけ言うのがやっとだった。

喫茶店を出ると、もう5時近かった。最後に行く予定だった海蔵寺へ向う。1394年、足利氏定が再建したという海蔵寺。ハギの木に覆われた参道を進むと、木々に包まれた姿の本堂や、仏殿が点在する。本尊は腹部に仏面を納めた薬師如来坐像で、夜毎聞こえる赤子の声を、開山に当って招聘した心昭空外がたどって地中を掘ったところ、薬師の面が現れたため、これを薬師像の胎内に収めたという。

「なんか、悲しい話だね。きっと、私達って、いつも大事なものを置いてきちゃったり、忘れてきちゃったりするんだよね」

「そうだね」

沙織の言うとおり、潤一もこれまでどれほど大事なものを置いてきただろうか考える。

「でも、私は違うよ。大事なものは絶対に置いてきたり、忘れたり

しない」

海蔵寺を出て、鎌倉駅へと戻る。

夕闇から夜へと向う時刻。街に灯りがともり、車のライトが二人を映し出す。海蔵寺から駅までは徒歩で25分くらいである。駅に近付くにつれ、お互いに歩みがゆっくりになり、無口になっていた。

やがて、二人の前に駅が見えた。

「帰りたくない」

沙織が小さな声で言った。潤一は迷っていた。しかし、鎌倉の街に溶け込んでいる旅館の姿を見た時、潤一は沙織の手を引いて自然に旅館へと向っていった。その日二人は初めて結ばれた。そして、それが最後となった。

異変

メジャ・デビューしてから、ソルトレインは多忙を極めた。それまでもライブ等で結構忙しいソルトレインであったが、メジャ・デビューしてから、全く異質の忙しさが襲っていた。雑誌のインタビュー、写真撮影、プロダクションとの打ち合わせ等々。

その頃、潤一の会社も大きな仕事が続々と決まり、目の回るような忙しさになっていた。潤一も毎日残業が続き、休日も休むことができない。そんな中でも潤一は沙織のことをずっと気にしていた。お互いに急に忙しくなってしまったため、会うこともままならないので、メルのやりとりや電話だけは毎日欠かさなかった。自分のことはともかく、潤一はメジャ・デビューした後の沙織のことが心配であった。今までとすっかり環境が変わった中で、あの繊細な沙織は自分を失わずに音楽活動をやれているのだろうか。

メルや電話では、いつも元気だと言っているが、それは潤一を安心させるために言っているのかも知れないと思うと、無性に会いたくなる。沙織の顔を見ないと安心できない。

だが、仕事はますます忙しくなっていた。今日も日曜であるが、出勤して仕事をしている。

「社長、お茶が入りました」

同じように休日出勤している内山久美がお茶を入れてくれた。潤一は会社ではお茶しか飲まない。もともとコ・ヒ・は好きではないのだが、外での会議等でもコ・ヒ・を出される機会が多く、やむを得ず飲むことになる。なので、せめて会社ではお茶を飲むことにしている。

「ありがとう。相変わらず、君の入れてくれるお茶はおいしいね」

「そうですか。別に社長だけ特別にしているわけではないんですが」

「なんだ、僕だけ特別かと思ったよ」

と冗談を言う。

「あら、社長、大分自分のこと買い被っていませんか」

こちらも笑いながら言う。

「でも・・・」

と今度は真剣な顔をして、久美が言う。

「社長、お身体大丈夫ですか。このところ少し顔色がよくないです。相当無理なさっていますね」

「うん、ちよつとね。しょうがないよ。これだけ大きな仕事が続々と入るとね。でも、ありがたいことで、今少し無理をしておかないと会社が飛躍できないから」

「それは十分分かりますけど。お身体が心配です。私達社員でできることはなんでも言うってください。それから、食事ちゃんとしていらつしゃいますか。特に朝食は大事です」

「食事ね、どうしても不規則になるし、それに今はつい食べ損なってしまうこともあるね」

「駄目ですよ、社長。食事だけはきちんと摂ってください。でないと身体に良くないですよ。私がお宅にお邪魔して食事の用意しましょうか」

「いや、君にそんなことをさせるわけにはいかないよ。必要となれば家政婦を雇うから大丈夫だ」

「社長、そんなこと言わないでください。私は奥様とマミさんに約

束しているんです。社長のことをお守りするって。今の社長の状態を見ていると、すごく心配なんです。ですから、私に食事のお世話と身体の管理をさせてください。でないと奥様とマミさんに叱られてしまいます」

「ありがとう。妻もマミも君のことを心から信頼していたものなあ。分かった。君の好意に甘えることにするよ。でも、僕としては、君自身のことをもっと大切にしてもらいたいと思うんだよ」

「大丈夫です。私のことは」

淳子の帰国

そんな中、アメリカから淳子が帰国していた。すでに何度か潤一の携帯に電話が入っていた。しかし、潤一は仕事が忙しかったため、無視していた。

「社長、淳子さんからです」

ついに会社に電話を寄越した。

「はい、宮本です」

「ようやくつながったわね。いくら携帯に電話しても出ないし、留守電にメッセージ入れておいても返事をくれないから会社に電話してしまっただわ」

「ごめん。今もの凄く忙しいんだ」

「そうらしいわね」

とのんびりした口調で言われると、つい腹がたつ。

「東京電波の仕事と西部電気の仕事が重なってしまっただ」

「あら、それは凄じやないの」

「そんなことで、しばらくは手が離せない」

「で、私はいつまで待てばいいわけ」

「だから、しばらくは無理だ。外に出る時間がとれない」

「あら、そう。じゃあ私がそちらに行くわ」

どうしても時間を作ってほしいようだ。アメリカでの話しをしたいのだろう。

「わかった。では、明日の夕方、とりあえず事務所にきてくれない

か」

翌日午後4時に、淳子は事務所の女の子たちのためにケーキを持参してやってきた。そして、社長室に入ってきたが、開口一番、潤一に向って言った。

「どうしちゃったの、その顔。疲れた中年のオヤジって顔してるわよ」

ほかに言い方があるだろうにと思うが、淳子らしくはつきり言う。

淳子の言っていることは間違いではないのだろう。恐らく、今の潤一の顔はそういう顔をしているのだろう。

「電話で言っただろう。今とてつもなく忙しいんだ」

「わかってるわよ。でも、あなたももう若くないんだから、無理しないことよ」

「うん、わかつてはいるんだが。悪いけど、後一時間くらい待ってくれないか。そうすれば一段落するから、外に出られる」

「わかったわ。じゃあ、事務所のほうで待っている」

そう言って、社長室から出ていった。淳子はアメリカから帰ってきて、一段ときれいになった。恐らくアメリカでいいことがあったのであろう。

それから一時間ほどして、二人は会社の近くの寿司屋へ入る。しかし、同じ寿司屋といっても、銀座や六本木にある高級寿司屋ではない。ごく普通の寿司屋である。

「いらっしやいませ。毎度」

会社に近いこともあって、潤一もよく利用する店であり、大将とも顔馴染みだ。だが、淳子をつれていくのは初めてである。淳子が店に入った瞬間、店のものが全員、驚いた顔になった。あまりにも店に似合わない客だったからだ。今日は、黒のリボン付きベロアカツトソに黒のプリッスカートというシックな装いだ、なぜだか淳子が着ていると目立つ。しかし、凄いのは淳子はどこまでも淳子であるということだった。どんな場所でも、淳子は変わらない。だから、しばらくすると店のほうが淳子に合わせてしまっている。大

将も、従業員もすっかり淳子のペースに巻き込まれている。これが淳子の魅力なんだろうと思う。かつては、潤一もそういう淳子が好きだった。今日は込み入った話しになりそうだったので、店の奥にある唯一の個室をとってもらった。

「アメリカ、どうだったの」

「楽しい仕事だったわよ。日本に進出する企業があつて、その際のプロモーションをすべてうちの会社に任せるというのよ。それでね、本当はあなたにも手伝ってほしかったんだけど」

「僕は今無理だけど。そうか、それは良かったじゃない。で、その会社の社長が例の人」

「そう」

「それで、そちらのほうは？」

「その前にあなたに聞きたいことがあるの」

「何？」

「さっき事務所の女の子に聞いたんだけど、あなた今変な子にうつつを抜かしているんだって」

「変な子？うつつを抜かす？」

その言い方に、潤一はムカつとする。

「うちの事務所の子がそんな言い方をしたのか？」

「そういう言い方はしなかったけど・・・、何よ、そんなムキになつて」

「変な子とかうつつを抜かすなんて言い方をするからだ」

「でも、そういうことなんでしょう。いったい何でなの。私がいない時に、何をしているの」

「君には関係ない」

「関係ない？あるわよ、なんで私に関係ないのよ。私はね、アメリカで彼の申込みを断ってきたのよ」

それは意外だった。さっきの淳子の様子では、アメリカ人の申し出を受けてきたのだろうと思っていた。

「そうだったのか」

「それなのに、あなたは私がない時に、さつさと若い子に気持ち
を移していたってわけ」

「別に君のいない時を狙ってやったわけではない。ただ、偶然その
時期だったに過ぎない。」

それに、僕は君とのことを約束したわけでもない」

「そうよね、だから、しょうがない？」

「悪いと思っているよ。別にそういうつもりではなかったけど」

「今度は謝るわけ。」

「でも、謝るしかないんだ。今、僕は彼女が好きだ」

もう、はっきり言うしかなかった。淳子はそれを聞いて黙り込んだ。
そして、しばらくしてからまた聞いてきた。

「どうということ？」

「だから、僕は白鳥沙織という女性が好きになった」

「バカじゃないの。彼女いくつだって言うの」

「25歳だ」

まだ淳子は事実を認めようとはしない。

「あなた、自分の年知っているわよね」

「ああ、もちろん。間もなく50歳になる。私は彼女と結婚すると
かは一言も言っていない。ただ、今の彼女が好きただけだ」

「だから、バカじゃないって言っているのよ」

「バカ、バカって言うな」

「だって、バカなんだから・・・。私はどうなるのよ」

「だから、さつきも言ったように悪いと思っている」

「悪いと思っている。バカにしないで。私は子供じゃないのよ。は
いそうですかとも言うと思ったの。冗談じゃないわ。許せないわ
よ。あなたも、その女も」

「彼女には関係ない」

「だから関係あるのよ。いいわ、その子と勝負するわ」

「勝負する？」

「そうよ」

「何を、どう勝負すると言っんだ」

「女として勝負するという意味よ」

「止めてくれないか。君への償いはなんとでもする」

「あなたってわかってないわね。これは私の問題よ」

潤一はそれ以上もう何も言わなかった。疲れていた。プライドの高い淳子の気持ち収まりつくようなことが言えればよかったのだとは思う。だが今の潤一には、そんな言葉も思いつかないくらい疲れている。

「あなたって、大体デリカシ-がないわよね」

「そうだと思う。君の言うとおりだ」

「最低ね、もういい、私帰るわ」

徹底的に潤一が悪者になることで、淳子がプライドを保ったまま引き下がる口実を与えられた。淳子は個室を出た後、店のものに向って艶然とした笑顔を作り、

「じゃあごめんなさい。私、先に帰るようになりましたの」

そう言って、店を出ていった。もう2度と会うことはないであろう淳子の後姿は彼女らしく堂々としていた。潤一は、心の中で淳子に詫びた。

潤一倒れる

ソルトレインのメジャ-デビュー-は成功を収めた。音楽評論家谷口正雄の後押しもあり、マスコミでの注目率も高く、順調な滑り出しとなった。だが、そのことが路上ライブの開催を不可能にした。沙織がメジャ-デビュー-に当って、ひとつだけ心残りがあるといっていたのが、このことであつた。沙織は、自分たちの音楽活動の原点は路上ライブだと常々言っていた。特に、沙織は一番最初に作つたバンドの活動が路上ライブだったから、その思いが強いのかも知れない。自分の今があるのは、路上ライブのお客さんたちのお陰であると思っている。その人たちへの恩返しの意味でも、路上ライブは継続したいというのが彼女の考え方だった。潤一は、そのことを

知っていたから、テレビなどで活躍する彼女を見るたびに、喜びとともに彼女の想いを達成させてあげられない悲しさと思う。ソルトレインをメジャ・デビューさせたことを少し後悔する。潤一は、昨日沙織からもらった電話を思い出す。

「ねえ、潤さん、最近大きなホールでたくさんのお客様を前に歌うことができるようになって、それは嬉しいの。でも、私は聴いている人たちの表情が見えて、聴いている人たちの想いが私にも伝わってくる路上ライブがやっぱり好きなの。それができなくなったことが、ちよつと悲しいかな。でも、これって贅沢な悩みだよな」

「いや、そんなことはないよ。路上ライブは沙織の原点だものね。僕のしたことは良かったのだろうか」

「潤さん誤解しないで。私達本当に潤さんに感謝しているの。路上ライブはまたいつかやれる時がくると思うし。でも、潤さんに会いたい」

沙織の切実な思いが伝わってくる。潤一の思いも同じである。

「もう少しだよ。もう少ししたら、お互いに落ち着くと思うから。そうしたら会えるよ」

「そうよね、もう少しの我慢よね。でも、ひとついい」

「何？」

「今、これからあなたのために、電話ライブをしたいの。分かるよね。今日は潤さん、あなたの50回目の誕生日だもの。遠くにいて何もプレゼントをあげられないから、今ここで私から心からのプレゼントを渡したいの」

「ありがとう。何にも変えがたい嬉しいプレゼントだよ。本当に嬉しい」

潤一は、仕事が忙しいこともあって、今日が自分の誕生日であることをすっかり忘れていた。沙織は、そのことをすっかり覚えていてくれた。しかも、潤一が今一番望んでいるものをプレゼントしてくれるという。心の底から嬉しかった。

「なにがいい？」

「うん、今日は“旅立ち”が聴きたい」

“旅立ち”という曲は、沙織が昔の彼と別れた時に作ったという。悲しい歌詞だが、とても綺麗な曲で、潤一が好きな曲だった。

「はい、では今日は楽器は何もないのでアカペラで歌うね」

「そのほうがさらにいい」

「じゃあ、聴いてください」

沙織の歌う声が、電話を通して聞こえてくる。

「雪の日に二人は旅立つ」

あなたは右の道へ

私は左の道へ

雪の向こうに見えるのは

あの日のあなたの笑顔、優しい言葉

共に暮らした日々は、夢のように過ぎ

私の手のひらから消えてゆく

これから別の道を歩もうと言った

あなたの強い眼差しに

私は何も言えなかった

雪の日に二人は旅立つ

あなたは右の道へ

私は左の道へ

春の日の公園で

あの日あなたは風船を飛ばしていた

恋に傷ついた私の前に、風のように現れ

私の心の中を通り過ぎていった

これから別の道を歩もうと言った

あなたの強い眼差しに

私は何も言えなかった

しばらく聴いていなかった沙織の、懐かしくも美しい声が聞こえる。

アカペラだけに、純粹に沙織の声だけが潤一に聞こえてくる。歌詞の間のブレスの中に、かすかな緊張感と、潤一への想いが伝わってくる。受話器を耳に当てながら、自分は幸せだと思った。

それからの一週間は、大きなプロジェクトの最終段階に入っていた。潤一だけでなく、社員全員が目一杯働いていた。潤一は自分の身体の異常がひどくなっているのを自覚していた。すでに、いろいろな症状が出ている。別にお酒を飲みすぎたのでもないのに、吐き気がする、背中が痛い、腰が重いなどである。しかし、この仕事が終わるまで、頑張らねばならない。この頃では、毎日のように久美が最後まで一緒に仕事をしてくれて、久美の車で自宅まで送ってもらっている。

「社長、本当に大丈夫なんですか。お医者さんに行かないと駄目なのではないですか」

毎日、久美は車の中でそう言った。

「いや、大丈夫だ。もう少しでプロジェクトの仕事が終わる。そうしたら、僕の高校時代の友人が勤務している屋島総合病院に行くよ。幸い、事務所から近いし」

久美はすぐにでも病院につれていきたかったようだが、仕事のことをいわれると、それができなかったようだ。

そして、プロジェクトの仕事が終わったその日に、潤一は会社で倒れた。トイレで血を吐いたが、その場で倒れるわけにはいかないと身体を奮い起こし、ようやく事務所までたどり着いた時意識を失った。気がついた時に、一番最初に目にしたのは、内田久美の顔だった。もちろん、その周りには、社員の顔がいっぱいあったが。だが、潤一は家族のような久美の顔を見て安心した。

「社長、今救急車を呼んでますから」

救急車で運ばれた病院は、屋島総合病院だった。久美が救急車の人をお願いしたらしい。潤一は、友人の中丸陽一を自分の主治医にしてくれるように頼んだ。自分の身体のこととは自分で大体わかる。もう、覚悟は決めている。それだけに、今後の相談は親しい友人にし

たかった。

入院に当たっての手続きは、久美がすべてをやってくれた。彼女には感謝しても尽くしきれない。今日も、付き添ってくれている。

「社長、具合どうですか」

「うーん、昨日より少し楽かな」

本当は何も変わらない。だが、一生懸命にやってくれている久美の姿を見ると、そう言いたくなる。

「そうですか、良かった。顔色が少しいみみたいですものね。で、今日も検査ですって」

入院後の1週間は、検査に費やされた。

入院した翌日、潤一は久美に言った。

「内山君、お願いがある」

「为什么呢。社長」

「今回の入院のことは、一切沙織には伝えないでほしい」

「なぜですか。社長にとって、一番知らせなければならぬのは、沙織さんではないんですか」

「いや、逆だ。一番知らせてほしくないのが、沙織だ。彼女にとって、今が人生で一番大事なときだ。彼女のすべてを今に賭けてほしいんだよ。それが僕の願いだから……。知らせないでほしい」

「そうですか。わかりました。でも……。沙織さんがうらやましい」

微かに寂しそうな顔をして、久美は言った。

検査が終わった翌日、潤一は主治医の中丸陽一に呼ばれた。

「昨日ですべての検査が終わった。それで、君の主治医として説明しておかなければならないことがある」

「中丸、君は高校時代の親友だ。ここからは、医者中丸陽一としてではなく、親友の中丸陽一をお願いしたい。これからの説明はすべて包み隠さず話してほしいということだ。中丸、僕はもう覚悟ができています。自分の身体のこと大体わかる。だから、すべてを聞いて、これからのことを君に相談したいんだ」

「わかった。では、友人としてそして医者として、すべてを話す。君は胃癌だ。だが、もう他にも転移していて末期癌といってよい」
末期癌と言ったときだけ、友人としての中丸が顔を出した。その言葉はやや震えていた。

「ありがとう。感謝するよ」

予期してはいたことだが、やはりショックは受ける。覚悟していたはずなのに。心のどこかで違いかもしいれないと思っていたのだろうか。

「それで、あとどの位もつか？」

「あと4〜5ヶ月くらいだろう」

「あと、4〜5ヶ月」

来年の1月か2月頃、自分の生命が途絶える。

「それで、これからのことなんだけど。できれば、ホスピスに移りたい」

「ホスピス？」

「どうせ治らないんだったら、ホスピスで静かに死にたい」

「そうか。分かった。君の希望に添えるよう、手助けするよ」

潤一は自分の身体の異変に気付いた時から、インターネットでホスピスのことを調べていた。

「実は、ネットで少し調べていたんだ」

「ネットですでに調べた。お前らしいね」

「だけど、そこから先、どこにしたらいいか。専門家の意見を聞きたいんだ」

「ホスピスといっても、いろいろあつてね。緩和ケア、つまりホスピスだけど、それをほぼ専門に行っているクリニックもあれば、在宅での看取り・ホスピスに力を入れているところがあつたりと特色があるんだ。病院の場合、キリスト教関係の病院で緩和ケア病棟を併設しているところが多いかな」

「うん、僕がネットで見た限りでも、そのあたりまではわかった」

「とにかく、僕のほうで資料を集めるよ。資料が揃ったところでも

う一度話し合おう。それから、すぐには移れないから、それまでは僕の指示に従ってもらうよ」

最後に、中山が主治医の立場で言った。

方向が決まると、潤一にはやるべきことがいっぱいあった。そのほとんどは会社の事だった。潤一にはもう家族はいないので、その事に関しては考える必要がなかった。それに幸い仕事のことについても、つい最近まで抱えていた大きなプロジェクトは2つとも終わることができた。後は、会社の後継者つまり社長を誰にするかということと、今後の仕事のことだ。

翌日、潤一は会社の幹部を病院へ集めた。そして、自分の余命は後4〜5ヶ月であることを継げ、自分の後任として現副社長の石塚を指名し、仕事はすべて任せることにした。

社員には石塚から話してもらうことにしたが、久美にだけは直接潤一が話したかったので、病院に呼んだ。翌日の昼間に久美はやってきたが、病室に入るなり、もう泣いていた。

「社長、私が無理にでも、もっと早く病院にお連れすればよかったんです。それなのに・・・」

「いや、君のせいじゃない。内山君、僕は君のことは身内だと思っている。だから、君にはすべてを話しておきたい。頼みたいこともある。聞いてくれるかい？」

「はい」

「もう大体わかっていていると思うけど、僕は末期癌で、あと4〜5ヶ月の余命だ。でも、これはしょうがないことだ。妻と娘のところへ行けると思えば、それも苦ではない」

久美は、妻と娘のことを思い出したのだろう。涙を流している。

「君には随分世話になった。なのに僕は何も君にしてあげられなかった。その事を後悔している。どうか、この先は君の人生を見つけて幸せになってほしい。あちらに旅立っても、君が幸せになれるまで僕は見守っているよ」

潤一には久美の気持ち痛みほどよくわかっていた。潤一のこと

を好きだということ。しかし、娘の先輩であり、妻のよき友人でもあったが故に、自分の気持ちを打ちあけてはならないと強く心に決めていたことを潤一は知っている。

「それから、沙織には入院を知らせないでほしいと、この間お願いしたが、こういうことになったので、僕が旅立つまで知らせないでほしい。彼女から連絡があつたら、仕事で急に海外へ行くことになったと伝えてほしい。そして、全てが終わつたら彼女に知らせてほしい」

「社長、本当にそれでいいのですか」
「それでいいんだ」

ホスピス

それから一週間ほどして、再び中山から呼ばれた。部屋に入ると中山の笑顔に出会う。入院してから初めて見る笑顔だった。

「元気そうじゃないか」

「君の治療のお陰だよ」

潤一も笑顔で返す。

「例の資料揃ったよ。君の希望を入れつつも、僕のほうでチェックして選んだ。ここに載っているところなら、どこでも大丈夫だ。安心して勧められる」

「そうか。ありがとう。持つべきものは友だね」

「いや、でき得るならば、もっと違うことで役に立ちたかったよ」
やや声が湿り気を帯びている。

「でも、今の僕にとっては大事な選択だ。人生の最後を迎える場所だからね。その時にアドバイスをもらえたことは決して忘れないよ」
「そんな事言うな」

二人とも、沈黙してしまう。

「どこにするのか決めたら教えてくれ。僕のほうですべて手続きをとっておくから」

「何から何まですまない」

「主治医として当然のことだ」

「ありがとう」

潤一は立ち上がって握手を求めた。中山も立ち上がり、手を強く握り返してきた。

病室に戻り、ホスピスの案内に目を通す。確かに、それぞれ特色を持ったホスピスがいっぱいある。ただ、場所の問題もあった。家族のいない潤一にしてみれば、どこでもいいようなもので、東京から離れたリゾ－ト地のようなところを選択するのも一つの方法だとも思った。だが、リゾ－ト地というのは、戻れるから楽しい場所であるということに気付く。

色々考えたが、結局横浜にある真愛病院というところに決めた。その理由のひとつは、場所が横浜であるということ。潤一が生まれしたのは、東京の中野だが、住んでいた期間が一番長かったのは横浜だった。小学校の高学年から大学を出て就職して1年目までずっと横浜に住んでいた。その後父親の仕事の関係で埼玉に移ったが、やはり潤一にとって一番思い出の詰まった横浜を最後の地として選んだ。

真愛病院を選んだもうひとつの理由は、「病院内」に書かれていた病院の理念と緩和ケア（ホスピス）病棟部長の一言を読んで感銘を受けたためである。

そこには、こう書いてあった。

真愛病院 理念

緩和ケア病棟では、治療を目指した積極的な治療がもはや有効でなくなつた患者様に対するケアを行っています。身体的な苦痛だけでなく、精神的、社会的な不安を和らげ、患者様やご家族と共に、最後までその人らしく生き抜くことができるように援助しています。

緩和ケア病棟部長より一言

ホスピスは例えていえばオアシスのようなものです。決して特殊なものではなく、もちろんパラダイスでもありません。

「がん」という、はなはだ厄介な荷物を背負った旅人が、体と心を休めるところです。私たちスタッフは、つらい旅をしてきた方に寄り添って、人生の大切なひとときを共に過ごしたいと願っています。

理念にある「その人らしく生き抜くこと」

それは、まさしく潤一が日頃から思っていたことだった。これまででも、たまに後輩や部下などに悩みを打ち明けられたり、相談をされることがあった。そんな時、いつも最後に潤一が言っていたのは、「あなたらしく生き抜くこと」ということだった。

それから、緩和ケア病棟部長の言葉の中に、

「人生の大切なひとときを共に過ごしたいと願っています」

とあるのにも、感銘を受けた。人生にとって最後ほど大切なときはない。それは尊厳されるべきである。どんな人も死ぬ時は、たった一人で死ぬ。それまでどんなに深い関係にあった人でも、その人の死と一緒ににはなれない。心中は、その勘違いだ。たとえ、心中して同じ時間に死んだとしても、それは違う死である。だからこそ、死ぬ時はすべての関係を断って、一人で死ぬことを選びたい。

それに真愛病院では、音楽療法を取り入れたり、講演を聞く機会などもあるようだ。潤一は、こうした理由で真愛病院を選ぶことにした。

真愛病院

真愛病院への入院は、ひっそりで行った。久美だけが手伝いにきてくれた。横浜の真愛病院まで久美の車で移動する。

病院の入り口で、院長を始め婦長、緩和ケア病棟部長と、パンフレットに写っていた人たちの笑顔で迎えられた。皆、予想どおりの暖かな人たちのように見えた。屋島総合病院の中山のほうで大体の手続きを済ませてくれていたので、簡単な書類に記入するだけで済んだ。

すべて個室になっており、婦長の案内でこれから最後までを迎え

る部屋に入る。久美と一緒に室内を見回す。ベッドは家具調の電動リクライニングになっている。また、洗面台、冷蔵庫とミニキッチンがある。従って、自分あるいは、家族が調理することも可能になっている。潤一の部屋は、個室なので電話とソファベッドも用意されており、お客様を迎えることもできる。部屋にお風呂がついていないのが残念だが、それは病気が進行したとき、お風呂での事故を防ぐためと聞いて納得した。ただ、大浴場とは別に一人用の風呂もあるとのこと。

食事は原則、病室に運ばれて、それを食べることになるが、立派な食堂もあるので、本人の体調のよいときなどは、そちらで食べることも自由である。普通の病院と一番違うのは患者の自由が相当程度認められていることだ。というよりも、患者が自由に生活するのを病院側が可能な限りサポートするというものである。なので、身体が自由がきくうちは、自分の過ごしたいように過ごせる。消灯時間もなければ、アルコールを飲むのも禁止されることはない。

その日は、食堂で久美と乾杯をした。何の乾杯だかわからなかったが、とにかく久美の労をねぎらいたかった。

最後の旅

親愛病院での生活が始まったが、それは楽しいものだった。治療を受けているせいもあるのか、体力的には入院前よりかえって回復しているような気がする。時々痛みがやってくるが、それでも痛み止めの薬をもらっているので不安はない。

潤一は、部屋にいる時は読書をしていることが多いが、たまには久美に買っておいでもらったDVDを見たりしながら過ごしていた。潤一の今の状態なら外出もOKとのことだったので、許可をもらい横浜の街を歩くようになった。かつての自宅周辺まで足を伸ばしてみる。何も変わっていなかった。もちろん、住んでいる人は変わってしまっているのだろうが、建物は変わっていない。高校生の頃の思い出が甦る。

1ヶ月目は、こうして過ぎた。しかし、2ヶ月目になってそうした生活にも飽きてしまった。だが、気がつけばもう仕事からはまったく手を引いてやることはない。かといって、家族ももういないので、家族に向けて何かを残すと言う作業もない。それなりの資産も蓄えたが、それは沙織と久美の2人に残すことにした。すでに弁護士と相談し、遺言状を書いてある。二人には遺言状とは別に、手紙も書いた。それも弁護士から渡してもらうことにしている。久美には、自分が旅立ってしまうと、誰も墓守がいなくなるので、それを頼むと書いた。もちろん、それ以外のことも書いてあるが。沙織には、音楽を極めてほしいこと。そして、人生とともに歩む新しいパートナーを見つけてほしいと書いた。

だから、もうやることがない。果たして、自分は残された時間をどう過ごせばいいのか。

自分は「自分らしく生き抜く」のではなかったか。だが、「自分らしく生き抜く」とはどういうことなのか。今まではわかっていたつもりだったが、実は何もわかっていなかった。自分の命が、あと4ヶ月という時になって、改めて自分に問われている。これまでの人生では、自分らしく生きてきたと信じていた。だが、それも本当にそうなのか。

宮本潤一という、他の誰でもない人生は、どこにある。それは、誰かに、あるいは世の中に自分の業績をあるいは自分の存在を残すということではないのだろう。潤一は、真愛病院に入院して楽しく過ごした1ヶ月目とは、うって変わって悩むこととなる。だが、こうした時間を作ってくれたのも真愛病院だと感謝している。

久美は真愛病院に入院してから毎週1回は必ず来てくれた。ある日は仕事の帰りに、ある日は休日になんか来してくれる。事務所からも自宅からも、この病院は遠い。

「社長、お茶でいいですか？」

昼食を部屋と一緒に食べようというところだった。

「その社長というのは、もう止めてくれないか。もう違うんだし」

「それは無理です。私にとって社長は社長だし。それに、もし違う呼び方をしたら・・・」

私、自信ないし・・・」

「自信ない？」

「それ以上言わせないください」

潤一はまた久美に余計なことと言わせてしまったと思う。どうして、自分はこうも気が利かないのだろう。

「ごめん。とにかく食べよう」

今日は久美が二人で一緒に食べようと、青山の富寿司のおいしい寿司を買ってきてくれた。病院のほうには事前に断っておいた。かと言って、病院の食事がまずいというわけではない。むしろ、真愛病院の食事はおいしい。潤一が病院食ということでイメージしていたものよりもはるかにおいしい。しかし、こうして久美と同じものを一緒に食べるほうがやはり楽しい。幸い、まだ食欲はある。

久美は病院へやってくると、芸能界の話題とか、職場の同僚の噂など、たわいのない話をしていく。ただ、決して仕事の話をしない。それを潤一が望んでいないことを知っているからだ。今日も食事をしながら、そんな話をしていたが、その中で今年会社に入った見山佐知という子との話になった。佐知が、どうやら営業係長の村田真澄に恋をしたらしいのだが、村田が振り向いてくれないというものだった。

「だからさ、見山君がもっと自分の意思を村田に伝えようと努力しないから、駄目なんだよ。彼女はかわいいんだし、あの鈍い村田みたいな男には、もっと積極的に」

とヒートアップして、さらに続けようとしたら、

「社長らしいですね」

と久美に言われた。

「社長らしい？」

「ええ、社長らしいです」

「どうということ」

「社長つて、ご自身では気付いていないのかもしれないけど、ちょっとおせっかいで、でもそれはその人のことを真剣に思ってくれているからで、皆感謝しているんです。いつも、何事にもまっすぐに向って生きていくっていう感じ。私はそんな社長が好きですけどね」他人が見る、“潤一らしさ”とは、こういうことだったのだろうか。自分で思っていたイメ・ジとはちよつと違ったが、本当はそうなのかもしれないと思う。“自分らしさ”なんて、潤一が考えるほど大げさなものではなく、案外こんなものなのかもしれない。久美によって“自分らしさ”を教えてもらった。

真愛病院に入つて、潤一は一人静かに自分の生命をまっとうさせようと思っていたが、どうやらそれは間違いだつたことに気付く。久美の言うように、本来潤一は常に人と接していることが好きで、もつと言えば人間が好きで、それぞれの人に頑張つてほしいとも思っているから、ついおせっかいになつてしまふ。今になつて考えれば、仕事の仕方もそうだつたように思う。その会社のために一生懸命になりすぎて、時に自分の会社の利益を忘れてしまふことがあつた。

それからの潤一は、医者や看護婦、事務の人たちはもちろん、同じ入院患者の人たちとの積極的なコミュニケーションをとり、“おせっかい男”となつていた。

「山本さん、駄目だよ。ちゃんと手すりにつかまって歩かなくちゃ。転ぶよ」

とか、

「中根さん、そんな暗い顔してないで、もつと頑張ろうよ」
などなど。

次第に病院では、潤一のことを知らない人はいなくなつていった。そして、沙織と久美には、日記形式で潤一の思いを伝えていくことにした。2人を愛しているから。だが、それが読まれようと、捨てられようと構わないと思つた。おせっかいだからそれでいい。久美の言うように、最後までおせっかいな人と言われない。それが潤

一の本望だから

最後の夢

今年の冬はいつになく寒かった。いくら病院内に暖房が入っているからと言っても、季節の厳しさは病人には堪える。12月に入つて、すでに何人かの人たちが旅立っていった。当然ながら、皆潤一の知っている人たちである。数日前まで話しをしていた人が急になくなる。他の人への影響を考えて、その人の死は知らされることはないが、皆わかるだけに辛い。潤一自体も、3ヶ月目に入つて体力は落ちてきた。痛みも時にひどい時がある。鎮痛剤の利きが悪くなっている。確実に死へと近付いている。

1日1日死に近付いていくにつれ、潤一はあの時やはり沙織の言葉を受け入れるべきではなかったと後悔している。自分はいい。思いつく抱えて旅たつていけるのだから。しかし、残された沙織の気持ちのことを思うと辛い。もちろん、あの時自分が癌にかかるとは思ってもしなかったのだが。

その時看護士の津幡芳江が入ってきて、満面の笑顔で言う。

「宮本さん、明日はクリスマスイブですよ。いっぱいイベントがありますから、楽しみにしてくださいね」

「そう。毎年イベントをやっているんだ」

「そうですよ」

しかし、この病院に入院している患者は1回クリスマスイベントを見ることができればいいほうだろう。自分は、どうやら見ることができそう。冥途の土産に楽しんでおこう。

そして、12月24日。その日は朝から雪が降っていた。病室の窓から見える雪は、静かに静かに天から降りてきていた。まさにホワイトクリスマスである。

“ねえ、母さん、マミ、もうすぐに側にいくよ”

天から降る雪をじっと見てみると、一本の白い糸ようにつながって見える。この糸を手繰り寄せれば妻の由美や娘のマミのいるところ

へたどり着けそうな気がする。

潤一は病室を出て病院内を歩く。もうすっかり体力は落ちているので、ゆっくり、ゆっくりと歩いて回る。ちょうどロビ－近く来た時だった。

「宮本さん、駄目ですよ。ちゃんと手すりにつかまって歩かないと危ないですよ」

最近入院した、今村佳代子に大きな声で言われる。2ヶ月前に、他の人に言っていたと同じ言葉を自分がかけられている。

「ありがとう」

立ち止まって礼を言い、ロビ－の外を見る。一面雪の静かな世界が見える。だが、病院内はいつにもまして慌ただしかった。その日の夕方から行われるイベントに向けて、病院の全職員が準備におおわらわだった。

そして、いつもより早い夕食が終わった後、クリスマスイベントが始まった。真愛病院には大きなホールがあつて、時々コンサートや慰問のショ－などが行われている。今日は全ての入院患者がホールに集められている。軽いものは、椅子に座り、重い人はベッドごとホールに入ってきた。潤一もその一人である。

婦長の秋野真美子がマイクの前に立つ。

「皆さん、今日はクリスマスイブです。わが真愛病院から皆さんにプレゼントがあります。今年は特別に楽しい催しも用意していますから、ぜひ楽しんでくださいね」

婦長の挨拶が終わると、正面の舞台に聖歌隊が現れた。それは看護師さんや、食堂のおばさんたちで構成されていた。静かに賛美歌が歌われる。すると、どこかへ消えていた院長がサンタクロースの格好をして現れ、患者一人一人に声をかけながら小さな箱に入ったクリスマスプレゼントを渡してゆく。

「中田さん、よくがんばっていますね。あなたが、看護師たちにもかけてくれる「ありがとう」という言葉に、どれだけ看護師たちは勇気をいただいているかわかりません。ありがとう。これプレ

ゼントです」

もう耳の遠くなった中田峰子のために、ベッドに膝まづきながら語りかけている。

「吉永さん、聞こえますか。この間吉永さんが私に画いてくれた絵、とても素的でしたよ。院長室に大事に飾っていますよ。ありがとうございます。これプレゼントです。受け取ってください」

吉永太郎は目がもうあまりよく見えない。だが、絵は相当にうまいきつと若い時に、相当絵を嗜んだのだらう。中小企業の経営者だったと聞いているが、本当は画家になりたかったのではないか。院長室にかけられてあった吉永の絵は心打つものがあった。

こうして、一人ひとりにゆっくりと回って歩く。やがて、院長は潤一のもとへやってきた。

「宮本さん、お会いできて嬉しかったです。入院してきた時のあなたは悲しそうな顔をしていました。すべてを捨てて、たった一人でここへ入られてきつと悲壮な覚悟だったのでしょうか。でも、しばらくしてあなたは柔らかな優しい顔になり、病院内のすべての人に暖かい声をかけてくれましたね。ありがとうございます。私からのプレゼント受け取ってください」

朝から降り続いていた雪は夜になり強くなっていた。中庭は白く染まり、街灯に浮かび上がった雪片は生き物のようである。

舞台では、ピアノリストによりクリスマスソングが奏でられている。今度は院長に代わり、看護師たちが患者の間を回っている。どれほどの患者が年を越せるのだろうか。12月というのは、同じ一月だが年を跨ぐために全く違う意味を持つ。短時間ではあったけれど楽しかったイベントも間もなく終わ리と思われた。その時、婦長が再びマイクの前に立った。

「皆さん、最後にもう一人スペシャルゲストにお出でいただいております。どうか彼女の歌声に耳を傾けてください。では、どうぞお願いいたします」

そこに現れたのは、白鳥沙織だった。そして、すぐ後に横山久美

がいて、こちらを見ている。“知らせてしまつてごめんなさい”という顔をしている。沙織がマイクをとる。

「皆さん、今日はお招きいただきありがとうございます。私は、こちらにお世話になってる宮本潤一さんの・・・」

そこまで言つて、沙織は言葉に詰まつた。

「宮本潤一さんの恋人です」

沙織は、そうはつきりと言つた。一瞬ざわついたが、すぐに静かになつた。

「今、私がこうして歌い続けていられるのも宮本さんのお陰です。でも、私は宮本さんに何のお返しもできていません。それなのに、私を置いて、遠いところへ行ってしまふなんて・・・」

後はもう声にならなかつた。

“バカ、泣くな。君はプロの歌手なんだ”

小さく呟く。しかし、潤一の目からも涙が零れ落ちている。でも、

沙織は気持ち奮い立たせた。

「今日はこれから、宮本さんのため、そして皆さんのため、命の限り歌わせていただきます。お聞きください」

もう聞くことはできないと思つていた沙織の歌声が聞こえる。潤一は目を瞑る。沙織との思い出が次々と浮かんでくる。

初めて沙織の歌声を聞いた渋谷の路上ライブ、城野早紀の結婚式で知つた沙織の歌の原点、メジャー・デビューが決まつた時の沙織の嬉しそうな表情、鎌倉で見せた寂しそうな表情と強い意思・・・。

歌い始めた沙織はプロの歌手として決して涙をみせず歌いきつている。そして、潤一が目を開けたとき、

「では、最後の曲になりました。この曲は今日の日のためだけに私が詞も曲も作つたもので、歌うのも今日が最初で最後になります。

“たった一日の思い出”という曲です。聴いてください」

柔らかな日差しが作る陰

季節はずれの鎌倉で 初めて繋いだ手を

あなたはそつと握り返してくれた

小鳥の囁く参道で

あまり似合わないジーンズ姿でカメラに手を振る
歴史という長い時間の中に紛れ込んだ二人の幸せ
それは小さいけれど 永遠に続くと思われた
たった一日の思い出の旅を

私は忘れない

茜色の夕陽が空を染める

季節はずれの鎌倉で あなたと入った喫茶店

まるで二人の部屋のようなだった

あの時あなたは私に約束したよね

私をずっと愛し続けるって 天使も二人を祝福していた

駅へと戻る道 幻となる

ヘッドライトに映し出された タキシード姿のあなたと

ウェディングドレスの私

たった一日の思い出の旅を

私は忘れない

季節はずれの鎌倉で 誓い合った愛

時は移ろい あなたの身体を傷つけ

私達を引き離そうとする運命

なぜ あなたは私を置いていつてしまうの

あなたの限らない優しさは 私の歌に命を与え美しく輝いている

あなたに残された短い時間の中に

まだあるわ 二人の幸せ

聞こえるでしょ あの日の朝の花の咲く声が

お願いだから その手で幸せを

私にください

沙織は歌の途中で舞台を降りて、歌いながら潤一のもとへやってきた。沙織の目が潤一の目をとらえる。瞬間、沙織の顔が歪む。涙

が零れ落ちそうになるのを懸命にこらえているのがわかる。

“ がんばれ、沙織 ”

いつの間にか潤一のベッドの横にきていた久美が声をあげ、泣いている。

“ 沙織。君のお陰で僕は幸せだった。心から感謝するよ ”

すべてを歌い終えた沙織は、その場で泣き崩れた。事情を知った病院関係者たちも皆涙を流している。沙織が、潤一のもとへ走りよって抱きついてきた。

「沙織、本当にありがとう。僕は幸せものだよ」

沙織は潤一に抱きついたまま、ただ泣きじゃくっていた。

翌日の朝、病院に泊まった沙織と久美が潤一のもとへやってきた。

「もつといたいのだけど、仕事があるからいったん帰るね。またすぐ来るから。これからはどんどん来るからね」

と久美のほうを見て、沙織が言う。

「社長、もういいですよ。私もこれからはいっぱい来ますからね。うるさいっていわれるくらい。ね、沙織さん」

「うん。久美さんには負けないから。でも、今日の潤さん、顔色いいわよね。少し安心」

「ほんと。とても顔色いいですよ。社長」

「まだ、社長って言うんだね」

「はい」

沙織が笑っている。今となつては、久美が約束を破ってくれたことに感謝している。

「じゃあね」

そう言つて二人は帰つていった。

その日の午後、潤一の様態が急変し、たった一人で旅立った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4052p/>

清冽な流れ

2010年12月10日11時20分発行